
± Days

空月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

±Days

【Nコード】

N5939W

【作者名】

空月

【あらすじ】

次々かかってくる幼馴染ズからの電話。恋愛相談？なんでそんなもの持ち込んでくるんだおまえらは…！しかも内容馬鹿らしすぎて頭痛がするっての！ 自称平々凡々一般人の、平凡から遠ざかる日常のお話。初恋に右往左往な幼馴染ズにアドバイザーとして無理やり転校させられたり、その先で変人な知り合いにバッテリーしたり、結局転校もアドバイザーの立場も受け入れたり。

一部お題使用の変則的な小説と言えるかも疑問な代物。基本地の文なしで進行します。逆ハーを脇から見ようがコンセプト（多分）

。 印はシリアス話。 飛ばしても問題ない構成にする予定なので
苦手な方は回避推奨。 別サイトにて連載中のものの転載です。

±Days 《Extra》にて季節小ネタとか過去話とか始め
ました。 番外的要素はそちらに。

1 目を逸らされるのは照れからじゃないって気づいてね (前書き)

電話相手はウザいヘタレ馬鹿。元氣系わんこキャラ担当。多分。

1・目を逸らされるのは照れからじゃないって気づいたよね

「はい、もしもし?」

「……ああ、あんたか。何の用?」

「は? 好きな人が出来た? そりゃよかったね、で、それが?」

「恋愛相談? もっと適任探しなよ。ていつか付き合ってたらない」

「あーわかったわかった。だから泣きまねすんな。気持ち悪い」

「」。………。へー、まあ、うん、あんたらしいとは思っ
よ。心の底から他人事でよかったと思うけど」

「いや、だってぶつちやけひくよそれ。犯罪すれすれって言うより
もう抵触してるって」

「うっさい。だったら他の奴にかける。時間が無駄に浪費されてい
ってんだけど、今この瞬間にも」

「結局何が言いたいわけ? はい五秒以内に簡潔に。ごー、よん、
さん、にー、」

「……ああ、うん? それだけ状況証拠が揃ってて気付かないのっ
てある意味才能だね。ポジティブとかいう問題じゃないっつーか」

「いやだからね、そうじゃなくて、」

「つまりだ。目を逸らされるのは照れからじゃないって気づこうね
つつつてんの。何でそこで照れてるとか思うわけ。単にひいてんだ
よそれ。関わりたくないと思われてんだよあんた」

「ああやかましい！ 泣くな！ うざいよ心の底からうざいよいい
年してめそめそ泣くな！ つつーかもう電話切っていいかなあ！？」

2 バラの花束贈っていいのは二次元の住人だけだからさ（or手編みマフラー

電話相手は自信家ナルシスト馬鹿。顔も頭もいとお色気担当。多分。

2 バラの花束贈っていいのは二次元の住人だけだからさ（or手編みマフラー

「……………はい、もしもし?」

「いや、ちょっとさっきまでうざい奴の相手してたから。それでどうしたん? 珍しいじゃんあんたが電話してくるとか」

「……………あんたもかよ! ああいや、こつちの話……………っつーか人選おかしいよ何考えてんの」

「あつそ。まあ、聞くだけならしてやらないこともない。で?」

「……………うん。……………う、ん……………?」

「いや待てその知識はどつから仕入れてきたんだおまえ」

「着眼点は悪くない ような気がせんでもないけど、何でそこを参考にするわけ。常識的に考えようよ、っつか自分の身に置き換えてみるよどん引きだろ!」?

「ああ、いや、うん……………そうだねあんたに常識を求めたこつちが馬鹿だったよね今は」

「ああはいスミマセンデシタ口が滑りましたー。んで、まあ意見求められたわけですし正直なところ言いますけどー」

「バラの花束贈っていいのは二次元の住人だけだからさ。ついでに言っとくけど手編みマフラーもだから。……まあ恋人同士とかならまだオツケーかもだけど、アプローチしてる段階ならやめとけマジで。十中八九ひかれるから」

「どーしてもやりたきゃ花束にしとけ。手編みマフラーはいろんな意味でレベル高すぎだから」

「やだよめんどい。自分で考える いやっば考えなくていい。あさつての方向に解釈しそっだし。そのまま目も当てられない惨事を引き起こしそっだし」

「言葉そのままの意味だつての。いい加減自覚しろよあんたの思考回路結構ぶっ飛んでんだよ。IQとか関係なく常識とかそっという面において」

「……絶対イヤですお断りですふざけんなこの野郎。面倒ごとには関わらないのが信条なんであしからずっ！」

3・「見つめるだけで胸が痛い」か、相手は頭が痛いだろうよ (前書き)

電話相手は無口無表情きつと一番常識人。素直デレの癒し担当。多分。

3・「見つめるだけで胸が痛い」か、相手は頭が痛いだろうよ

「あーハイもしもしなんのご用件でしょうかー？」

「いやあなたに非はないんだけど、精神的に疲れてんの今」

「ちよつとねー。ていうかなんかやな予感がするんだけどあんたも恋愛相談とか言わないよね言わないでくれ」

「……マジでか！ なんなのもう呪われてんじゃね、つつか嫌がらせかと思っわ」

「……もしかして、いやまさか。ああでもありうるよなあ……。あのさ、ちよつと聞きたいんだけど」

「もしかしてその好きな人って他の奴らと一緒にだったりしない？」

「ああやっぱりー……。なんつーかその子に同情するよホント。あんたら濃いイし」

「それであんたは何を聞きたいわけさ。つつかあんたもあいつらも人選間違ってると思うんだけど」

「へー……まああんたって押せ押せなタイプじゃないもんね。納得っ
ちやあ納得」

「……聞いてるこつちが恥ずかしいんだけど。まああいつらの話に付き合った後だと癒しだな」

「しっかしねー……」『見つめるだけで胸が痛い』か、相手は頭が痛いだろうよ」

「相手の立場に立って考えてみな　ってああ、あんたらの基準じやどうも思わないか。……ま、フツーの人はそんな複数人にあからさまなアプローチされたら困ったりすんだよ。その子がどう考えるんだか知らないけどさ。話聞いてる限りだと少なくとも喜んじやいないようだし」

「とりあえず、あんまり相手にストレス与えないようにね。別に止めたりはしないから。応援もしないけど」

「いや立場的に。鼻負するとうるさいんだもんあんたら」

「ま、ほどほどにねー」

4・いつ電話しても話し中ってそれ着拒だから (前書き)

電話相手は成金腹黒馬鹿。笑顔キャラっていうかヤンデレ担当。多分。

4・いつ電話しても話し中ってそれ着拒だから

「はいもしもしー」

「うん来ると思ったよあんたからも。それで？ どういうご用件でしょーか」

「……ほんとさー。人選が謎過ぎるんだけど。どんなアドバイス求めてんのあんたら」

「ぶつちやけ関係ないんだよこっちは。ていうか関わりたくないんだよ。なのに何故に巻き込むわけさ」

「だってメンドいし。……まあ他の奴らも話だけは聞いたから、あんたも話くらいは聞いてやるけど」

「うん、……へー……。……」

「いや、あのさ。普通に考えてそれはないだろ。いつ電話しても話し中ってそれ着拒だから。着信拒否。わかる？」

「いやいやいや、どんな前向き思考だよポジティブシンキングにも程があるよ。あんたって実は馬鹿だよな」

「つつかさ、それストーカーレベルだよ犯罪の匂いがするよ多分訴えられたら負けるよ？ 待てそーいう問題じゃない。世の中金

で支配しようとするなこの腹黒」

「とりあえずさ、電話はちょっとやめてやれ。流石に可愛いそうだな。ノイローゼとかなったらどうすんの」

「いやだからそういう問題じゃないって　あ、ごめんキャッチ入った。ちよつと失礼」

「　　っっておまえまたか！　ああもうまだ何かあんの！？　……っ
て、あれ、またキャッチ？」

「うっさい、ちよつと切るよ。……はいもしもし？」

「うわ、おまえもか。……いやこつちの話。今忙しいんでまたあと
で　　っておいまたキャッチかよ。超やな予感」

「はいもしもし？　……予感的中……嬉しくねえ。あああんなに
非はないから。でももうちよつと時間空けて欲しかったのが正直な
ところ　　ああまたキャッチが」

「あんた5分も待てないわけ　ああもうほんと面倒だなあんたら
！　どうせ他の奴らのとの電話も盗聴してやがるこの犯罪者。
まとめて話聞いてやるからどつか場所設けて全員集めて迎えよこせ
！　でなきや金輪際電話でてやんねーから！」

5・押してもダメなら引いてみる、相手も大喜びだ

「金の無駄遣い以外の何物でもないよね馬鹿じゃないのあんたら」

「いきなりどうしたんです？」

「どうしたもこうしたもないっての。確かにどっか場所設けて全員集めるとは言ったけどね、わざわざこんな馬鹿高そうな料亭の一室貸し切らなくてもいいだろうが」

「え、違うよ？」

「何が違うんだ馬鹿その一」

「一室なんてケチなことしてないよ。店ごと借りたんだよねカンナ？」

「もちろん。一室しか貸し切れないような男だと思われていたなら心外だな」

「ああごめん、やっぱり見誤ってたよ。馬鹿じゃないね大馬鹿だねもう救いようがないね」

「……………」

「あっ、レンリがまた隅っこに寄ってってる！？ よくわかんない

けど落ち込まないでレンリ！」

「待てレンリ。あんたは違うから安心しろ。どうせ他の馬鹿どもが勝手に場所決めて貸し切ったんだろうし？ それとユズ、音量落とせ。うるさい」

「私たちが場所を決めたのも貸し切ったのも間違いでないですが。どうしてあなたはそう、レンリにだけ甘いんです？ 同じ幼馴染なのに随分と扱いに差があると思うんですが」

「自分の胸に手を当てて考える馬鹿その三。日頃の行いの差だったの」

「日頃の行い、と言ってもレンリもさほど私たちと違うとは思えませんね。今回だって、電話をしたことには変わりないでしょう？」

「うっさいよこのナルシスト。心労の度合いが違うんだよストレス値とか」

「ひどいですね。傷つくじゃないですか」

「心にも思っていないことをいうな。ぶっちゃけウザい」

「私はユズじゃないので、罵られて喜ぶ趣味はないんですが」

「ちよっ、ミスミ！ オレだってそんな趣味ないよ!？」

「え、ないの？ 僕もそう思ってたんだけど」

「カンナも!？」

「だって僕たちと未だに付き合ってる時点で、そう考えるのが自然だと思っただけだ」

「れ、レンリは！？ レンリは違うよね？ オレのことマゾだとか思っただけよね！？」

「……………」

「なんで無言！？ 目を逸らすのっ！？ レンリだけはそんなことないって信じてたのにー！」

「……………」

「それ困ってたんだよ。幼馴染なら気づいてやれ。レンリもそんな方向に暮れた顔しない。っつーかさっさと本題行こう本題。時間の無駄だ」

「久しぶりに会った幼馴染に冷たくないかな？」

「久しぶり？ 家も近所とは到底言えない学校も違う他の接点もないのに三日とあけずに出没する奴らが言えた台詞じゃないね」

「幼馴染という接点があるじゃないですか」

「昔の話だろーが。マジでさっさと縁切ったときゃ良かった」

「……………」

「わかった。前言撤回するからその目はやめるレンリ」

「っていつか本題って何のこと？」

「ほんととーに鳥頭だなおまえ。何すっぱり忘れてんだよ。こつちには全然関係ないってのにあんたら全員揃って恋愛相談なんかしてくるからこうなったんだっての」

「でも、私たちがそんなこと相談できるのはあなたくらいですし」

「何でわざわざ相談なんかするわけ。好きにすりゃいいじゃん」

「だってこういうの初めてだし。色々不安なんだよー聞いてよー！」

「正直ウザい。あんたらの恋路とかどうでもいいし」

「彼女、電話でも言ったけど一般市民なんだよ。どう接するのがいいか勝手がわからなくてね」

「だったら関わるなよ。それが出来ないならせめて巻き込むな」

「……………」

「んな顔しても駄目なもんは駄目。面倒ごとには関わらないのが信条なんで。特に今回は関わったらろくなことにならないってわかりきってるし」

「いつそ強行手段に出てもいいんだけど？」

「それはどういう意味か聞きたくないが聞かせてもらおうか」

「具体的には君に僕たちの学校に転入してもらおうとか」

「人権はどこいった。世の中金でどうとでもなると思うなよ。んなことやったらマジで縁切るから」

「それは困るな。でも悪い話じゃないと思うんだけど」

「学費その他諸々は私たちが持ちますし、家を離れたくないなら迎えだって寄越します」

「寮もあるよ！ 好みに合わないなら新しく建てさせるし！」

「……………」

「そんな期待に満ちた目で見られても。っつーかさ、そういう問題じゃないっての」

「じゃあどついう問題なのかな」

「そもそも恋愛相談をしてきたってことはアドバイスが欲しいってことだよな」

「まあ、そついうことになりますね。話を聞いて欲しかったのもありますが」

「よしわかった。アドバイスしてやる。ただしこれ一回きりだから。金輪際この話題持ち込むなよ。アドバイスも求めるなよ」

「え、それはオーボーじゃ……………」

「うっさいヘタレ。っつーわけでアドバイスだけど」

「……………」

「押ししてもダメなら引いてみる。相手も大喜びだ」

「……………何ていうか、君が僕たちの恋路を心底どうでもよく思ってるのだけは伝わってきたよ」

「それアドバイスなの?! っていうか『相手も大喜びだ』ってヒドくない!?!」

「あなたらしいといえばあなたらしいですけどね……………」

「……………」

「『一般人』からの意見だ。気に食わないならそれで結構。んじゃ……………なに、レンリ。さっさと帰って課題終わらせたいんだけど」

「……………」

「あー、そか。あんたは別に押しまくってたわけじゃなかったねそっついや。まあ基本は同じで。逆に押ししてみればいいんじゃないかね?」

「そんな投げやりなアドバイスで私たちが納得するとも?」

「だってこれ以外アドバイスないし。っておい、何してんだおまえ」

「いや、ちょっと腰を落ち着けて話し合いをしようかとね?」

「言い方は穏便だが明らかに監禁する気満々だろおまえ」

「やだなあ監禁だなんて。せいぜい軟禁だよ」

「ごめんオレにカンナは止められないよ……っ！」

「とか言いながら加担してんじゃねえよこの馬鹿。今どこにメール打った」

「安心してください。明日の朝には転入手続きも済みますから」

「どさくさに紛れて聞き捨てならないこと言ったなミスミ。おまえら覚悟は出来てんだろうな？」

「……………」

「今回ばかりはあんたも同罪だからなレンリ？ 申し訳なさそうな顔してもさすがに許せないから。フツーに無理。許容量オーバーだから」

「まあまあ。じっつっくり話し合おうよ、ね？ 幼馴染の偶のワガママくらい聞いてくれたっていいと思うんだ」

「本性だだ漏れてるぞ腹黒。……ああもうウザい超ウザいナチュラルに犯罪行為すんじゃねーよ一般市民ナメんなよこの馬鹿ども。ぜつてえ後悔させてやる……っ！」

とりあえずお試し期間

「お、怒ってる、よね？」

「一体何が不満なのかな？　ウチの学校、お金積んで土下座してでも入れて欲しいっていう人もいるのに」

「まあ仕方ないですよ。少々強引に事を運んだのは私たちですし」

「……………」

「……………オーケイわかった理解した。あんたらが馬鹿で阿呆でどうしようもなく自分勝手だっていうのはよく知ってたつもりだったが、どうやら幼馴染フィルターの的なものがかかってたらしいな。これからは頭に『心底』ってつけることにするよこの真性馬鹿ども。つつーかユズ、いちいち聞くな見て分かれ神経逆撫ですんじゃねーよ。カンナ、そういう問題じゃないって何度言わせる気だその耳は飾りかそれとも脳味噌入ってねえのかその頭。ミスミ、わかってんならすんなよってか少々どこじゃねーだろうが過小評価にもほどがあるつつーの。レンリ、言いたいことがあるなら口で言え目で訴えるな今回ばかりは甘やかさないからな？」

「……………これは怒ってますねえ」

「だから言ったじゃん！　せめて初登校は明日にした方がいいって……………」

「ユズ、多分問題はそこじゃないと思うよ?。」

「……………」

「なに、レンリ」

「……………」

「言いたいことがあるなら口で言えって言ったのが理解できなかった? その耳と口は飾りなのかそれともコミュニケーションをとるうつつー気さえないのかどっちだ?。」

「うわ怖っ! 笑ってるけど目エ笑ってないよねあれ!。」

「レンリにはいつも甘いですから、ああいつのを見るとなんとというか、むしろこちらが居た堪れないですね」

「っていつか口調が荒れすぎて怖いんだけど。いつもはあそこまでないよね?。」

「その三馬鹿聞かえてんだけど。それとも聞かせてんの?。」

「すみませんごめんなさい許してくださいー!。」

「聞こえることを前提に言ったのは否定しませんよ」

「距離的に聞かえないように喋るのは無理そうだしね」

「……………」

「ん？」

「……………ごめんなさい」

「おおっ、レンリが喋った！」

「なに、そのクララが立った的な言い方。レンリだって全く喋らないわけじゃないって知ってるよね、ユズ」

「まあまあカナ。確かに言葉を口に出すのは稀といえば稀ですし」

「……………それは何に対しての謝罪なのかなレンリ。その返答によっては窓叩き割ってでもこの車から降りるよ？」

「容赦ないね」

「さらに上を求めるとか鬼畜だよねー」

「自分の発言には責任持てよユズ？ あとで覚えてろ」

「！？」

「馬鹿ですねえ、ユズ」

「……………意見聞かずに、勝手なことして、ごめん。……………でも、来て欲しかった、から」

「だったら何をしても良いって？」

「そうじゃ、ないけど」

「散々あんたらに言ってるけど、権力とか財力とか、何かを成し遂げるのに必要なものを持つてるからって、それをしているってわけじゃないっつーのはわかってる？ 特にあんたらは人権無視しすぎ。こういうことされてどう思ってたんでくくらい考える。想像するくらいの頭はあるだろうと思ってたんだけど？」

「それは、……怒るかな、とか、嫌だろうな、とか。わかってる、けど……」

「けど何？」

「……………」

「そこまでにしておいてください。レンリ一人を苛めたって仕方ないでしょう」

「あんたが言うかその台詞」

「言いますよ、見ていてレンリが可哀相なので。……私の意見を言わせてもらえば、あなたがどう思うのか想像した上で、それでも自分の欲望を優先した結果が今の状況ですから。今あなたに糾弾されたところで意見を翻したり、全部なかったことにしてこのままウターンなんてする気は全くないですが」

「そうそう。君だってわかってるんじゃないの？」

「理性と感情は別っつー言葉知ってるかこの野郎」

「と、とりあえずさ、ちょっとでいいから通ってみてよ！ 案外良
いかなって思えるかもだし！」

「そこに至るまでの過程のせいで悪印象しか抱けないんだけど」

「そういう言ってるうちに着いたよ？ まあお試し期間みたいなも
のだと思って」

「カンナの家が経営してますから、至れり尽くせりですしね」

「……同じクラス、だし……不便はない、と思う……」

「とりあえず、俺たちの学園によっこそっ！」

「……はー。わかったお試し期間なお試し期間。面倒だと思ったら
ソッコー帰るから。そこんとこ肝に銘じとけよこの馬鹿ども」

説明不足はトラブルの元

「……で？ これはどういふことなのか裏事情含めて理路整然と簡潔に教えてもらおうか」

「無茶言っね」

「えー、裏事情なんてないよね？」

「本当にユズはおめでたい頭をしてますねえ」

「へへー…ってそれ普通に貶してるよね!？」

「一瞬褒められたんだと思えたその思考回路にびっくりだよ」

「カンナひどい!」

「黙れ馬鹿ども特にユズ」

「名指しされた!？」

「マジで黙れ頼むから。あんたが口開くとたいてい話が進まないんだよ。っつーかカンナ、人の問いをスルーしてナチュラルに奴らの会話に加わるな。あんたが説明するのが筋だろうが」

「何のことだかわからないな」

「笑顔如きで誤魔化せると思ってたんの？ 何年幼馴染やってると思
ってたおまえ」

「そんな怖い顔しないでくれないかな。ちょっとからかっただけじ
やないか」

「自分の日頃の言動を逐一思い返してからそういう台詞は言え。そ
うやって人をおちよくるのが趣味なんだか何なんだか知らないが、
時と場合と人を選べっての」

「一応選んでるつもりなんだけど って嘘だよ、待って。ちゃん
と話すから出て行こうとしないで」

「次ふざけた言動したらなにがなんでも帰るからな？」

「わかったよ。ごめん」

「私たちの立場の方が弱いことは自明の理なんですから、さっさと
話してしまったほうが心象的にもよかつたんじゃないですか、カン
ナ？」

「そういう意見はもっと早く言っただけ欲しかったな」

「それはすみません。言うまでもないことだと思っていましたから」

「……………そう」

「おいそこ二人、笑い合いながら不穏な空気を醸しださない。怖が
ってんのが居るから」

「ああ、ごめんユズ」

「え、オレ確定！？ いや間違つてないけど！ だって何か怪獣大決戦的な怖さがあるんだもん！」

「レンリは困ることはあつても怖がつたりはしないですしねえ」

「……………」

「『だもん』つて子供かおまえは。…………レンリ、どうかした　　つて、ああ、チャイム」

「おや、もうこんな時間でしたか」

「うっかりしてたね。まあ別に特に支障があるわけじゃないけど」

「つてことは一限サボるの？」

「ふふ、駄目ですよユズ。そんな言い方をするとまるで私たちが授業を放棄しているみたいじゃないですか」

「そうそう、授業よりもっと大切且つ有意義なことのために授業に出ないんだから」

「いや待てそこ。何て言い訳しようが単なるサボりだから。授業放棄以外の何物でもないから。っつーかこの会話のどこが授業よりも大切且つ有意義なんだ」

「それはもちろん、あなたと言葉を交わしているという点において

ですよ」

「うわ寒っ！　そういう台詞はあんたらを見てきゃーきゃー言ってるお嬢さん方に言ってるやね。ほら見る鳥肌立っただろうが」

「真実を言っただまでなんですけどね」

「常々思ってたけど頭沸いてんじゃないのかおまえ」

「……………」

「レンリ、なんで微妙に悲しそうな顔をするのかわからないというかわかりたくないんだけど、あんたもミスミと同意見とかじゃないよな？」

「現実には認めないと駄目だよ？　レンリも授業より君と話してる方がいいってことなんだから、そこは喜んであげたらどうかな」

「いや無理。思考回路が意味不明すぎて理解できない」

「ええー、なんで？　オレわかるよ？　カンナもわかるよね？」

「まあ、元々の発言主は僕だからね」

「だよな。なんでわかんないのかわかんないよ？　ただ一緒に居られて時間も気にしないで話せるのが嬉しいってだけなのに」

「だー、もううるさい！　っつーかカンナ、おまえあわよくばこのまま説明せずにすまそうとしてるだろう、とつとと説明しろ！」

「あ、照れてるー」

「ユズの言い方はストレートですからねえ」

「照れ隠しで八つ当たりとかするんだね、君でも」

「……………」

「…………よしわかったおまえら実は私に帰って欲しいんだな？ お望みどおり帰ってやるよ今すぐに！」

「わーっ、待って待って何かよくわかんないけどオレが悪かったから帰らないで！ー！」

「すみませんもう茶化しませんから ほらカンナ！」

「ええつとごめん、本当にちゃんと説明するから、っていうか君交通手段持ってないんだからそんな無謀なこと言わないで 痛っ！」

「…………カンナ…………馬鹿」

「何かレンリまで怒ってる！？」

「今のはカンナが悪いですよ、全面的に。なんであなたはこういうときに限って失言するんですか」

「失言って あ、」

「とか言ってるうちに出てっちゃったじゃん！ もうみんな馬鹿だよー！ー！」

多分それは運命的な（前書き）

いつもと文の形式が違います。地の文あり。

多分それは運命的な

そのとき三笠樹は、退屈で何の生産性も見出せない（と思っ
てい）授業をサボって屋上に行こうとしていたところだった。

「……？」

授業は既に始まっている。こんな時間に廊下を歩いている人間は、
この学園に限ってはそう居ない。授業をサボった場合のデメリッ
トが強すぎて、サボろうなどと思う生徒が皆無に等しいからだ。

しかし今日は珍しく、自分以外に廊下を歩いている生徒を見つ
けた。

「その嬢さん、どこ行くんだ？」

声をかけたのは、純粋な興味からだった。

滅多に居ない自分以外に授業をサボっている人間だというの
もあるが、何よりその生徒の纏う衣服が興味を惹いた。

この学園の標準服ではない。だが、他校の制服というわけでも
ない。紛れもなくこの学園に所属していることを示す衣服。

その存在すら危ぶまれていた女生徒用の特別服を、その人物は纏
っていた。

立ち止まり、振り向いたその女生徒は、訝しげに樹を見る。そう
して口を開いた。

「……何か用ですか？」

おや、と樹は眉を上げた。次いで確信する。

この女生徒は、学園に来て日が浅いと。

自分で言うのもなんだが、樹は学園内で顔が売れている。容姿や家柄のこともあるが、何よりこの学園の権力者と真つ向から対峙できる人間として。

故に、大抵初対面の生徒からは畏怖やら憧憬やら様々な視線を向けられるのだが、この女生徒の視線は一言で言えば、無。

全く何の感情も孕まないそれに樹は彼女がこの学園に来て日が浅いのだろうと判断したのだが、ふと、女生徒の視線が僅かに値踏みするようなものに変化した。

「あなた、この学園の生徒ですよね」

「そうだけど？」

わざわざ確認するまでのものないことだと思っただが、とりあえず肯定しておく。

「その様子だと授業に出る気はないみたいですし、ちょっと付き合ってもらえませんか？」

樹の経験則からいって、こういう場合は大抵艶っぽい話に繋がったりするのだが、彼女の瞳はどこまでも冷静で、まったくもってそんな様子はない。

それがますます興味を煽って、樹は笑顔で了承を伝えた。

瞬

間、僅かに女生徒が眉根を寄せたことには、気づかなかつた。

樹の案内で、二人は屋上へと足を踏み入れた。女生徒が吹く風に目を細める。その横顔を見つめて、樹はさて、と心中で考えた。

彼女のことを面白そうだと思ったのは本当だが、同時に何か厄介ごとに関わることになりそうだと思ったのも本当だ。しかし樹としては常々この学園生活がつまらないと感じていたので、むしろ厄介ことは大歓迎である。

この学園に入れられてからというもの、様々なことで退屈を紛らわしていたものの、最近は手ごたえがなくてつまらなかつたのだ。少々面白そうな事実が最近発覚したが、まだアプローチ方法を模索中だった。

そんなときに現れた事情ありげなこの女生徒。暇を潰すにはもってこいだろう。

ああ、そういえば名前を聞いていなかったな、と今更思った樹は、人間関係の基本として外せない自己紹介をすることにした。

「俺は三笠樹。嬢さんの名前、聞かせてもらえる？」

「上総」

「それ、名字？ それとも名前？」

「苗字ですが、それが何か」

「名前は？」

「呼びかけるには名字だけでも充分だと思えますが」

「つれないねえ。でもまあ、それもそうか」

言いながら、樹は脳内で学園の名簿を思い返す。最新の名簿での全学年の名前と照らし合わせてみるが、やはり『上総』という姓はなかった。この学園に入学するには金も学力も必要だが、コネも必要だ。少なくとも学園に在籍している人物の親戚あたりかと見当をつけていたが、外れたらしい。

ここは率直に聞いてみることにしよう、と樹は考え、問いを口にした。

「嬢さんの服、特別クラスの制服だよな？ あそこ、男しか居なか

「つたはずだけど転入生？」

「どのようなものかはともかく、反応は返ってくるだろうと樹は思っていた。だが、返ってきたのは想定外の反応だった。」

「特別クラス？」

怪訝そうな声音で上総と名乗った女生徒は呟いた。樹は内心首を傾げる。何故制服を纏う本人が怪訝そうなのか。

「……あんの馬鹿どもが……っ！」

地を這うような声で吐かれた台詞を、樹は一瞬空耳だと思った。しかしすぐに気を取り直し、現実を認める。今の台詞が目の中の女生徒のものだと。

「大体理解できました。ありがとうございます。それでは」

淡々とそれだけ言ってその場を去ろうとした女生徒に樹は珍しく慌てた。何やら彼女の方は目的を達成できたようだが、樹は全く理解できていない。

ここまで自分のペースに引き込めないまま　むしろ乱されて別れることは、自身のプライドに賭けてできなかった。

故に、樹は一か八かの賭けに出ることにした。確証はない、ただの勘と僅かな推測による言葉を女生徒に投げる。

「嬢さん、特別クラスの四人組の知り合い？」

瞬間、女生徒は射殺しそうな視線で樹を振り向いた。

「四人？」

「え」

「四人って言いましたね？ 『特別クラスの四人組』」

先ほどまでの様子とは一転して自分に詰め寄る女生徒に困惑を隠せない。一体何がそんなに彼女の癪に障ったというのか。

「その四人って底抜けに明るい馬鹿犬とフェロモンただ漏れの色気魔人とホントに生きてんのかって聞きたくなるような無口無表情人間と虫も殺さないような善意あふれる笑顔を貼り付けたこの学園の権力者？」

つらつらと並べ立てられた言葉はあまりにも予想外で、樹の思考が一瞬止まる。

しかし何とかそれを脳内で消化して、またも樹はおや、と思った。

「もしかして嬢さん、あの四人組と親しいの？」

彼らの形容の仕方からして、ただの『知り合い』ではないことは明白だ。学園の権力の象徴に等しい彼らをそのように表すことができる人間は、これまで居なかった。

「親しい……まあ、そうなんでしょうね……」

何故か不本意そうに女生徒は呟く。ますます樹は彼らと女生徒の関係に興味を持った。

そして同時に、彼女が彼らと親しいのは確かだが、今現在何か含むところがあるということを感じ取る。

思った以上に面白そうな『厄介ごと』に、樹は自分の唇が笑みを浮かべるのを止められなかった。

なんだかんだで結構甘い

「このッ、馬鹿どもー！」

「はいっ!？」

「ユズ、それで『はい』って返事しちゃうのはどうかと思っよ

「お帰りなさい、 って、その後ろの、どうしたんです？」

「『後ろの』って、ヒデエなその言い方。あんたがそんな忌々しそうな顔すんの初めて見た」

「『それ』どうしたんです？ 付き纏われてるならそれなりの対処はしますよ？」

「無視？ 相変わらず嫌われてんのな、俺」

「人間を『それ』呼ばわりするな、ミスミ。声かけられたついでに情報提供者になってもらっただけだったの。どこかの誰かさんたちが聞いたことにすらまともに答えてくれなかったものでね？」

「……………」

「レンリ?」

「……………」

「言っとくけど、まだあんたら許したわけじゃないんだからね？」

「……………」

「……………わかったわかった。そっち行けばいいのはわかったから引張るな」

「……………嬢さん何者なわけ？」

「君には関係ないよ」

「あんたには聞いてないっての。なあ、嬢さん。情報提供のお礼代わりに教えてくれない？」

「あなたが勝手に喋ったんでしょ……………と聞いたところですが、まあ良いです。ただの幼馴染ですよ。見てわかりませんか？」

「幼馴染、ねえ……………」

「それ以外の答えは持ち合わせておりませんのであしからず」

「ああいや、別に疑ってるわけじゃない。ちょっと意外だっただけで。こいつらに、こんな風に接する相手がいたとはねえ、っていうむしろ感心してる的な」

「その言葉、何やら不安を煽りますね。納得もしますけど。っつーわけでカンナ。きっちり説明してもらおうか」

「何をかな？」

「この上まだしらばつくれるつもり？ この制服、『特別クラス』の制服だって？ ンな悪目立ちするようなもんだとはひとつことも聞いてないんだけど」

「聞かれなかったから答えなかったままでだよ」

「ふざけんなよこの腹黒が。目立つの嫌いで平穩をこよなく愛してる私に対する嫌がらせか嫌がらせだなわかった今すぐ帰ってやろう」

「待つて待つて一足飛びにその思考に飛ばないでー！ 『特別クラス』所属にしたのは単に快適な学校生活になるようにっていうオレたちなりの気遣いってどうかそんなのだから！ 嫌がらせじゃないから！」

「だったらなんでそのこと先に言わなかった？ 聞いてみれば『特別クラス』って男しかいないんだって？ 悪目立ちどころか都市伝説並みの扱い受けると思えないね。道理で同じ制服着た人がいない上にやたらめったら視線を向けられるわけだ。ただでさえあんたら目立つのに何それ拷問？ 別に私は今すぐ帰ったって何の問題もないんだよ付き合ってたんのはいちいち抵抗すんのが面倒だったから以外の何物でもないし。『お試し期間』つつたのはあんたらなんだから、その『お試し期間』を今すぐ終了させたって文句は言えないよなー？」

「落ち着いてください。先に言わなかったのは、言えばその時点であなたが帰ってしまうのではないかと危惧したからです。私たちはできる限りあなたに快適な学園生活を送って欲しいんですよ。それには私たちと同じクラスであることが最も都合がよいのです。確か

に隠すようなことをしたのは悪かったです……」

「……はあ。まあ、あんたらのやることだったのに、こういうことになる可能性をちゃんと考えてなかったこっちが悪いつちや悪いけどさあ。せめてこの制服フツのに換えてくれない？ 珍獣でも見るような つつーかつちノコやらネツシーやら見るような目で見られるのは心の底からお断りなんで」

「……わかった。標準服をすぐに用意させるよ。それだったらまだ通ってやつても良いって思ってくれる？」

「あー、うん。まあ1日くらいは。『お試し期間』だし」

「えー1日ー？ 一緒にここ通おうよー、オレ昔っから夢だったんだよー？」

「うるさいユズ。無理やりここに来させられたこっちの心情も考える。そのまったくもって理解できない夢とやらをこの先現実にしたってんならそれ相応のことをして気が変わるように仕向けてみなよ。あんたには絶対無理だと思っけど」

「うつ！ ……オレだってやればできるって！！ ……多分」

「ハイハイそうですねーユズはやればできる子だもんねーガンバレー」

「何その投げやりっていつか棒読みな声援？！」

「言っとくけど今現在この学園に対する心象マイナス値だから。主にあんた達の言動のせいだ。一応『お試し期間』くらいは設けてや

るけど、それ終わったらとととオサラバするつもりだし。……ま、
せいぜい頑張りなよ?」

たかが服、されど服

「おー、標準服も似合っじゃん、嬢さん」

「どうもありがとうございます。お世辞でも悪い気はしませんね」

「いやいやいや、お世辞じゃないって」

「ではそう思っておくことにします」

「……嬢さん、なんつーか捻くれてんなー」

「ありがとうございます」

「いや、褒めてねえよ?」

「知ってますけど」

「……あ、そう」

「っていつか君、何でまだここに居るわけ?」

「居ちゃ悪いってのか?」

「悪い。邪魔。目障り。君特別クラスの所属じゃないでしょ」

「うわ、ヒデエ言われよう。いいじゃねえか別に。もうちょっと嬢

さんと喋りたいただけだっ

「え」

「……嬢さん、その顔はいくらなんでも俺傷ついちゃいそうなんだけど」

「それはすみません」

「今の明らかに言っただけだよな？」

「まあそうですね。これ以上の厄介事も厄介な人間もごめんなので申し訳ないですがお引き取りください間に合ってますから」

「……ノンブレスで言い切っちゃうほど迷惑なんだ？」

「迷惑というかお断りなだけです」

「それ、どう違うわけ」

「『迷惑』だとマイナス感情を含みますが、『お断り』ならプラスマイナスゼロな感じです」

「なるほど。とりあえず、『お断り』の方がマシなわけね」

「どちらにしろ拒絶の意ではありませんが」

「……いやそこは敢えて明言しないで欲しかったんだけど。傷つくってマジで」

「そう言われても。偽りのない本心ですし」

「……追い討ち？」

「そんなつもりはなかったんですが、結果的にそうになりましたね」

「……」

「？ 今度はどうしたの、レンリ」

「……」

「そんな目で見られても」

「はいはいはい！」

「いきなり何、ユズ」

「代弁！ レンリはオレ達ほっとしてソイツと話してるのが寂しいんだと思います！」

「それはあんたじゃなくても？」

「オレもだけど！ ほら、レンリも否定してないし！」

「……」

「いや、この歳になってそんなことで寂しがるとかどうかと思うんだけど」

「そういうのに年齢は関係ないと思いますよ？ 自分が好意を持つ相手に自分を見ていて欲しいと思うのは、至極当然のことだと思いますし」

「なんかその言い方もどうかと思うんだけど……っっていうかミスミ、さりげなく ええと三笠さんとの間に割り込んでくるっことは、あんたも寂しいだの何だのっと思ってるわけ？」

「ええ、もちろんです」

「そこはそんなイイ笑顔で答えるところじゃないと思うんだけど」

「それは僕たちが決めることだよ。……うん、サイズもぴったりみたいだね。特注の甲斐が」

「わわ、ちょ、カンナ！」

「……特注？」

「き、聞き間違いですよ、聞き間違い」

「その反応がむしろ確信に至らせてるから。……なんか異様にサイズぴったりだと思ったら、これ特注なの？ 何がどう特注？」

「あー、えっと、それは、その……」

「ハキハキ喋れカンナ」

「嬢さん嬢さん」

「何ですか。今取り込み中なんです」

「うわ、冷たい視線。ちょっとクセになりそー」

「変態はお断りなんですが」

「いやいやいや、そこは俺の名誉のために否定させて。変態じゃないから。ただの軽口だから」

「はあ。で、何ですか」

「んー、いや、『特注』の意味、教えてやるうと思っ」

「……知ってるなら教えてください」

「！ そんな奴から聞くくらいなら僕が」

「黙れカンナ。あなたの説明だとまた何か都合の悪いこと隠されそうだから三笠さんから聞く」

「……っ」

「今回はかりは仕方ありませんよ、カンナ。日頃の行いが悪かったんだと思って諦めましょう」

「実際悪いしね！」

「……ユズ？」

「え、何?! カンナ怖いよその目! 人殺せそつだよ!?!」

「いい加減、口は災いの元だって理解した方がいいですよ、ユズ」

「だ、だってホントのことじゃんー！」

「いやー、アイツら面白いなー。嬢さんの前じゃいつもあんななワケ？」

「……外野は放っておいて、説明してもらえます？」

「ああ、『特注』についてだったっけか」

「ついさっきのことを忘れてください」

「悪い悪い。この学園の標準服つてのはちょっと変わっててな。カタログから選ぶのとオーダーメイドがあるんだよ。カタログからだと、まあいくつかのサイズと多少のデザインを選べる。んで、オーダーメイドだと全身の詳細データからこまごましたところまでサイズ合わせて作ってくれるのな。デザインも一点モノ。基本は変わんねえけど」

「『標準服』なのにデザインが違うんですか？」

「まあな。でもちゃんと全体で統一されるようにデザインされてるらしいぜ？」

「……『特注』というのは『オーダーメイド』ってことですか？」

「いや、それがまたややこしいっつーかなんっつーか。……んー、わかり易く言やあ、オーダーメイドの上級版つてとこだな。特別クラス服にしか適用されてんの見たことねえんだけど、嬢さんの場合は標準服にも適用されたことになるな。オーダーメイドじゃ弄んない部分のデザインを弄つてるとかじゃねえかと思うけど。何せ標準服で『特注』つてのは初めて見るから詳しくはわかんねえな」

「……………」

「……………嬢さん？」

「……………何か弁解は？ 馬鹿ども」

「い、いや、黙ってたのは悪かったです、大きくは弄ってないですし、言わなければわかりませんよ？」

「そ、そうそう！ それに似合ってるし！」

「あー……………その、オーダーメイドも特注もさして変わりはないからね？」

「いやあるだろ。標準服で頼もうとすると金額天井知らず っつーか実質発注不可つて聞いたぜ？」

「……………へえ」

「……………ああもうホント君出てってくれないかな」

「何でそう余計なこと言うかなっ？！ オレたちに何か恨みでもあるのー！？」

「それ、標準服は……デザイナーの好意、だから……」

「？ 好意？」

「……はあ。やっぱり言わないと駄目ですか」

「どっぴうこと、ミスミ」

「この学校のデザイン関係は全て、カンナのお兄さんがやってるんですよ。あなた、気に入られてるでしょう？」

「デザイン……ってことは藍里さん？」

「……。そうだよ、あの愚兄」

「いつもも言ってるけど愚兄呼びはどうかと、……何、あんたたち、藍里さんまで巻き込んだわけ？」

「違うよ。何でわざわざ愚兄を引き入れる必要があるのさ。注文するときに勘付かれたんだよ。……知られたら面倒だから黙ってたのに」

「絶対あの人会いに来ますよね……親族特権フルに使って」

「変なところ行動的だしテンションの上がり下がり激しいからあんまり近づきたくないのにな」

「それに、いつも良いところとっていくから、嫌い……」

「……あんたたち、藍里さんには結構世話になってた気がするんだけど」

「世話になってたから嫌なんだよ。逆らいにくいし」

「逆らわなきゃいいだけの話だよねそれ」

「僕たちに関係ないならそうするんだけどね。……っていうか君、絶対僕たちが愚兄に来て欲しくない理由わかってないでしょ」

「？ 今ユズとレンリが言った通りじゃないわけ？」

「そうだけど、その根本的な理由って言うか……うん、いいよ。むしろわからないままで居てくれた方がいい気がする」

「その言い方もすごくひっかかるんだけど」

「いえいえ、そこは気にしないでください」

「そうそうスルスルー」

「……気にしない、で……」

「あんたたちってこういふときはっか団結するのが性質悪いよなマジで」

意外と世間は狭かったりする

「ああ、1限が終わったね」

「2限って何だったっけ？」

「特殊授業ですよ。……確か今日は新しい講師が来るはずですが」

「特殊授業？ そんなのもあるわけこの学校」

「この学校つつーか、特別クラス限定だけだな」

「予定だと芸術家でしたよね、カンナ」

「そつだよ。資料によれば結構若い男だったはずだけど……」

「……それって、そこ……教室の前に居る人、じゃ……」

「へえ……って、あ、」

「？ どうしたの」

「女神っ！！」

「！？」

「……お久しぶりです、浅見さん」

「女神、女神、本当に女神？ 僕が幻視しているわけではないよね？」

「夢でも幻でもないですよ。……それより、何度も言っていますが、女神という呼称はやめてください。私もドン引きですが周りもドン引きですから」

「でも、女神は女神だよ。それより、どうしてここにいるの？ 女神は公立の学校に行ったと聞いていたのだけど」

「ちょっとした事情がありました。浅見さんこそどうしてここに？」

「僕のパトロンの関係で、こここの『特別クラス』っていうのに話をしに来たんだ。ええと、確か『特殊授業』講師ということになるのかな」

「……なるほど。あなたにそんな物が務まるのかという疑問はともかく、事情はわかりました」

「女神それちょっと酷い……でもそういうところが好きっ！」

「色々な意味で問題な発言は控えてください浅見さん。本当に変わってませんね。少しは真っ当になったんじゃないかと淡い期待をしていたんですが」

「今更僕が変わると思つもの？ それより女神、今日は暇？」

「暇じゃないです」

「そろそろ僕のところ来てくれる時期だよな？　せつかくだから今日来て！　じゃないと僕女神欠乏症で死んじゃうよ」

「人の話は聞いてください。っていうかその女神欠乏症っていうネーミングはどうかと思います」

「だって女神、なかなか来てくれないし。約束してくれたのに酷い」

「私も忙しいんですよ」

「……来ないと石膏像作ってやる」

「……石膏像？」

「気にするなカンナ」

「文脈からすると脅しみたいですけど」

「油絵も水彩画も描いてやる。最高傑作創ってやる。アトリエに全部飾って、奏ちゃんには裸婦画送ってやる。今日会ったからより正確に描けるし。依頼で書いてるやつも全部女神モチーフに描き直してやる」

「……浅見さん」

「ふんだ。女神が悪いんだからね。女神が来ないから女神の代わりに女神を描くんだもん。僕我慢したもん。来てくれなかったのは女神だもん」

「何歳児ですかあなた。幼児退行しないでください。ただでさえ子供っぽいのに。……わかりました。今日は無理ですが近日中に伺いますから」

「近日中じゃだ」

「いい年して駄々をこねないでください」

「だって明確な期限がないと女神バツくれそう」

「『バツくれる』って……誰から聞いたんですかそんな言葉」

「みつちゃん」

「またあの人ですか。相変わらずろくなことしませんね。……バツくれませんよ。近日中が気に入らないなら明日にでも伺います。それならいいですか？」

「……うん」

「石膏像も油彩画も水彩画も依頼品の書き直しもやめてくれますね？」

「……」

「や・め・て・く・れ・ま・す・ね？」

「ちえー……わかった」

「何でそんな名残惜しそうなんですか」

「言ったでしょ？ 女神は僕の女神なんだから、本当はいつだって見て、触れて、愛でたいんだって。でも女神も奏ちゃんも駄目だって言うから我慢してるんだよ」

「ちょ、ちょ、ちょっと待ってください」

「ちっ、やっぱりっこんできたか」

「今本気で舌打ちしましたね！？ ……じゃなくて、何なんですか、裸婦画とか触れていたいだとか！」

「っっていうかそれ以前にどういう知り合いなの！？ 何か家にしょっちゅう行ってるみたいな会話だったけど！」

「……………こ、恋人……………とか……………？」

「い、いやそれだったら流石に俺たちだって気付くだろうし、違う、よね……………？」

「何であんたらがそんなに動揺するわけ？ まあ恋人ではないけど」

「女神女神、この子達何？」

「せめて誰って訊いてくれませんかね。…………手前の4人は幼馴染で、我関せずでニヤニヤしてるのがついさっき知り合った人ですよ。幼馴染のことは話したことあるでしょう」

「嬢さん、ニヤニヤは酷いっつーかそこはかとなく悪意を感じるんだけど」

「えーっと、奏ちゃん曰くの『害虫』？」

「…そんな形容してたんですか、兄さん」

「うん」

「全く……」

「ナチュラルにスルーはヒデエよ嬢さん……」

「『そうちゃん』で『兄さん』ってことは」

「……もしかして奏さんのお知り合いなんですか、その人」

「そういうこと。まさかこんなところで会うとは思わなかったけど」

「恋人じゃなかったんだー！ 良かったあ〜……」

「……うん、よかった」

「いやだからなんでそんな安心してるんだあんなら。マジで謎過ぎるんだけど」

時間は有効的に

「ところで浅見さん」

「？ なーに？ 女神」

「『特殊講義』って、何する予定だったんですか？」

「えー？ なんか適当に作品選んで作り方とかコンセプトとか説明すればいいのかなーって。そんなようなことパトロンも言ってたし」

「それ、時間いっぱいやるつもりでした？」

「んーん。きつと生徒さんもアク強かったりするんだろーって思ってたから、様子見て早めに切り上げるつもりだったよ？ だって作品に思い入れがあるとかじゃないとつまんないよね？」

「それは人それぞれかと思えますけど……それならちよつど良かった。早めに切り上げるつもりだった分の時間、ちよつと私にくれませんか？」

「いいよー。女神が望むなら担当の時間丸ごとあげちゃってもいいくらいだし！」

「そんなには要りません。というか一応これお仕事でしょう」

「あ、視線が冷たいよ女神っ！ 呆れ通り越して軽蔑しちゃった的な？ でもそんな目もいいね！ なんか創作意欲がムクムクと、」

「湧かせないでください」

「もうわいちゃったし！ ……あれ、もしかして頭の話？」

「……流石に頭を指したつもりはありません。さんずいに勇気の勇の『湧く』です。沸騰の『沸く』じゃありません」

「……嬢さん、いつつもこんな会話してるワケ？」

「……。大体は」

「なんつーか、……大変そうだな、嬢さん」

「ええ、もう本当に……」

「疲れてんなー」

「そうですね」

「時間もらって何するつもりなんです？」

「授業時間の一部ってことは、僕たちに関わること？」

「しご名答。ここに連れてこられた大本の理由、どうにかしようと思
って」

「理由？」

「『え、何それ』的な顔に見えるがまさかまたすっかり忘れてんじやないだらうなユズ」

「え。えーつとお……」

「忘れてるに決まってるでしょう、ユズなんですから」

「ひどいよミスミ!？」

「事実なんだから酷くないと思うよ? ……『彼女』のことだね?」

「そ。そもそもお前らそれがあつたからこんな無茶苦茶なことやりやがったわけだし? だったらそれに関して無駄な時間を過ごすよりは多少のアクションを起こそうかと思ってね」

「って言っても何をどうするわけ?」

「とりあえず情報収集 っていうか私その子のことほとんど何も知らないし。あんたらのその子に対する非常識な行動についてなら知ってるけど」

「非常識ってひどくない!？」

「ひどくないひどくないむしろこれ以上ないほどぴったりだから」

「確かになー。俺が知ってる限りでもちよつとどつかと思うところあったし」

「君は黙っててくれないかな?」

「それはお断りだなー。んな楽しそうなこと見過ごすわけにはいかないって」

「事態引っ掻き回すつもりならお引き取りくださいね三笠さん？」

「いやいやそんなつもりはないですよ嬢さん？　んな怖い顔するなっつて」

「そのなんか企んでそんな笑顔引っ込めてから言ってくださいそういうことは。引っ込めても引っ込めなくても信じるつもりはありませんが」

「嬢さん辛辣」

「愉快犯っぽい言動がなければもう少し当たり障りない対応したんですけどね。面白半分で事態引っ掻き回されたら被害が来るのはこっちですし」

「俺そーいうことしそつに見えんの？」

「見えます」

「清々しいほどの即答をアリガトウ」

「そのの『ついさっき知り合った人』、みっちゃんに似てるね」

「……そうですね。だから警戒してしまうんですけど」

「『みっちゃん』？」

「奏兄さんの知り合い。快樂主義の刹那主義の愉快犯で変態な変人」

「……俺、その人に似てんの？ スゲー嬉しくないんだけど」

「喜ばれても困ります。ああいう人は一人で十分 いや、できるだけ身近に居ない方がいいですし」

「女神女神、それはヒドイと思うよ？」

「いいんですよここに居ませんし。居たとしても別にあの人気にしませんし」

「まあそうだけど。むしろ面と向かって言ったら喜ぶかもだしね
え」

「いやホントそんな人と似てるとか言われるのは心外なんだけど」

「是非ともそう思ったままでいてください」

「いやだから、」

「それで情報収集って何をするつもりなのかな？」

「オレたちからも話聞くる？」

「協力は惜しみませんから遠慮せずどうぞ」

「……………（じくじく頷いてる）」

「三笠さん押し退けてまで言い出さなきゃならないほど切羽詰った内容なのかそれは」

「……お前らほんっと嬢さん好きなのな……」

親愛表現は相手を見ましよう

「……うん成程大体わかった。とりあえずカンナ」

「うん？ 何かな」

「おまえはいい加減個人情報保護法とかプライバシーとかを足蹴にするのをやめろ。犯罪だから」

「別に足蹴にしているつもりはないんだけど」

「自覚がないなら尚更悪い。他の奴らも大概だが、おまえが一番性質悪いよな」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

「どうしてそうなる。……まあいいか。ひとまず情報としては十分かな。じゃあ次のステップに行くとしよう」

「次のステップって、何をするつもりですか？」

「黙秘権を施行する」

「え、なんでそこで黙秘権！？」

「あんたらに言うところクなことにならない予感がするから。いや大抵のことはそうだけど今回は特に」

「今さりげなく酷いと言わなかった？」

「別にさりげなく言ったつもりはなかったんだけど」

「嬢さんハッキリ言っね」

「これくらいじゃないとこいつらには伝わらないんで」

「そこが女神のいいところだよねっ」

「そんなキラキラした目で見られても困ります浅見さん。というかあなたに言われると複雑な気分」

「？ なんで？」

「わからないならそれでいいので気にしないでください。ってことでちょっと行ってくる」

「……………」

「さっき言わないって言ったの聞いてなかったのかレンリ」

「聞いてた、けど」

「その手は引き留めるつもりか着いてくるつもりかどっちだ。どっちにしる却下だけ」

「……………」

「そんな目しても駄目なもんは駄目だったの。一応あんたらのためを思ってるんだから大人しく待ってる」

「……！」

「なんでそこで嬉しそうに頬を染める……？」

「……なあ、嬢さんのあれってマジでわかってないの？」

「何普通に話しかけてきてるのキミ。耳障りなんだけど」

「別にいいじゃないですか、カナナ。……あれは本気で言ってると思いますよ。どうにもあの辺りの認識に齟齬があるようで」

「嬢さんって実は鈍い？ むしろ天然？」

「それとはちょっと違うと思いますが……うまく言い表せませんね」

「とりあえず離せレンリ。……ユズはユズで何つずつずしてるわけ？」

「……抱きついて良いっ？」

「何頭沸いたようなこと言ってるんだお前」

「だってだって、今のすっごく嬉しかったから！」

「嬉しかったから抱き着くっていうその繋がりがわからん。そもそも何が嬉しかったのかもただ。あと好きな子いるのにそういってとするのはどうかと思う」

「女神女神、でもハグはわかりやすい親愛の表現だよ？ 僕にはいつもさせてくれるよね？」

「……！！」

「ええっ！？ 何それずるい！！！」

「……その話ちょっと詳しく聞かせてもらえるかな？」

「聞き捨てなりませんね。『いつも』ってどういことですか？」

「……誤解を招くような発言は慎んでください浅見さん。いつもっていつほど無いでしょう。というかアレはあなたが勝手にしてくるだけです」

「でも女神、口で言うほどスキンシップ嫌いじゃないよね？」

「何さらっと誤解を招きそんな発言を重ねてるんですか。確かに嫌いとは言いませんが、単に慣れただけです」

「奏ちゃんもスキンシップ激しいもんね！」

「そうですね、我が兄ながらアレはどうかと思いますが」

「……えいっ！」

「っ！ ちょっと、ユズ何してる」

「抱き着いてる？」

「だから好きな子がいるのに簡単にそういつことするのは　って
こらレンリ」

「……………」

「そんな不服そうな顔されても。　っていうか手加減しろお前全力で
腕にしがみついてないか」

「……………」

「いや緩めるだけじゃなくて離そうよそこは。　あとユズも離れる暑
苦しい」

「女神、僕も抱き着いて良い？」

「この流れでなんでそんな発言が飛び出してきちゃうんですか。空
気読んでくださいホント。あとそのこの2人、不穏な空気を感じるん
だがお前らまでやるなよ？」

「駄目ですか？」

「いやこの流れに便乗するくらいしか機会ないかなーって」

「駄目に決まってるだろうがこの馬鹿。便乗する流れなんてどこに
もないっての」

「あはは、嬢さんモテモテだなー」

「呑気に笑ってないで助けるくらいはしてくださってもいいと思う

んですが」

「いやなんか馬に蹴られそうだから止めとく」

「意味不明な発言するくらいなら素直に面白がってるって言うてくれた方がいくらかマシです」

「今のも率直に言ったただけなんだけどな。まあ面白がってるのも否定はしない」

「ああもうなんで私の周りにはこんなばっかりなんだよ誰か助けろ……！」

天然ほど厄介なものはない

「あ、お帰り嬢さん。収穫はあった？」

「まあそれなりに。付き合わせてすみません、三笠さん」

「いーっていーって。あいつらのあんな顔見ただけでお釣りがくるし。あれは傑作だったなー」

「……悪趣味ですね」

「あつはは、よく言われる。で、もう戻るわけ？」

「ええ、とりあえずは。……これ以上時間をかけると色々心配ですし」

「それは確かに。じゃあご案内いたしますよ、お嬢さま」

「お願いします　けどそのうすら寒い口調はやめてください」

「……嬢さん、だんだん遠慮なくなってきたよな？」

「遠慮する必要性を感じなくなってきたので」

「ま、いーけど。そんじゃ　」

「あ、いたー！」

「……………」

「……………」

「戻るまでもなく向こうから来たな？」

「……………そうですね」

「なかなか戻ってこないから、迎えに来たよ。危険な目には合わなかった？ 主にこいつのせいで」

「なかなか何も30分と経ってない上に待つとけって言ったの忘れたのかこの馬鹿。あとその発言は色々和三笠さんに失礼だ」

「でも授業が終わるまでは待ちましたよ。それから探したんですから大目に見てください」

「『戻るまで』待って注釈付けたの忘れたわけ？ 待てもできないのか犬以下かお前ら。　っていうか浅見さん、一体どんな授業をしたらこんなに早く終わるんです。そもそもなに一緒にうるうるしてるんですか」

「最初に言ったとおり、作品解説込みの作品鑑賞しただけだよー？ ちゃんと興味持ってくれるような題材選んだし」

「興味持ってくれるような題材……？」

「うん。いつも持ち歩いてよかった」

「なんかすごくヤな予感がするんですが、もしやアレを人目に触れさせたんじゃないでしょうね」

「アレ？ どれのこと？」

「 つ出すな開くな空気読めこの天然ー！！」

「怒った顔もいいね女神っ。スケッチしていい？」

「いいわけないでしょう本当空気読んでください、っていうかまさかソレ中身全部見せたんじゃない」

「全部じゃないよ。奏ちゃんにも怒られちゃうし」

「まあそれなら良………くない全然良くない結局見せてるんじゃないですか何してくれやがってるんです浅見さん」

「嬢さん嬢さん、口調乱れてる」

「今そんなことにかかずらってられないんですほっといてください」

「……これはまた、すっごく動揺してますね」

「オレたちとしては良いもの見れたけどねっ」

「見せてもらったのは1冊分だけだったけど、あれって多分奏さんのコレクションからスケッチ起こしたんだろうね。すごい再現率だったし」

「……………」

「わかりますよレンリ。貰えるものなら貰いたいですよねえ。羨ましい」

「詳しいことはわからないけど、お前らがなんかギリギリの発言してんだろうなーってのはわかった」

「待つてください三笠さん、その言い方もしかや誤解してませんか。確かにある意味ギリギリの発言ですが。……っていつか何血迷ってるんだお前ら」

「だってキミ写真嫌いで昔のってほとんど残ってないから。この際絵でもいいかなって」

「まず何で欲しがるのかわかんないがいろんな意味で却下だ却下」

「その人はOKなのに不公平だと思います！ 異議ありっ」

「こつちだつて事後承諾だつたんだつての。これ以上拡散されるのは御免被る。っつーかこれ以上意味のない会話で時間を浪費するつもりはないから」

「意味がない会話だなんてひどいじゃないですか」

「ひどくないし意味ないものは意味ない。せつかくこつちがそれなりに手助けしてさっさとお役御免しようとしてんのに邪魔してんのはお前らだろうがこの鳥頭ども。そもその発端意図的に忘れてんのかこの脳みそスツカラカン。次脱線したら問答無用で帰るぞ知り合いも現れたことだしな？」

「ごめん」

「すみません」

「ごめんなさいー！」

「……ごめんなさい」

「わあスゲエ見事な手綱さばき。慣れてんなー嬢さん」

「不本意ながら。付き合いは長いですからね。……というわけでもしものときは頼みます、浅見さん」

「いいよ。ただしそのままウチにお持ち帰りさせてくれるならねっ！」

「誤解どころじゃない爆弾発言は止めてください。これだから天然は」

「でもいいよね？ ギブ&テイクが女神のポリシーだもんね？」

「ポリシーなんて大それたものじゃありませんが。まあいいですよ。今日中に家に帰してさえくれれば」

「大丈夫だよ。女神のご飯食べて女神と一緒に過ごして女神観察したいだけだから！」

「観察とか本人目の前にして言わないでください。いかげん言葉のチョイスの仕方を学ぶべきだと思います」

「一番しゃべるのがみっちゃんな時点で無理だよ」

「……納得してしまう自分が嫌ですが、それなら仕方ありません。でもこれ以上ヤツに染まらないでくださいね」

「善処します」

遅ればせの本題、そして

「で、今度こそ本題だけど。件の子の様子をちよつと見てきた」

「……だから着いてくるなど言ったんですね」

「ぞろぞろ着いてきたら目立ってしょうがないし。うっかり見つかるものなら様子見の意味がなくなる。……それで、あんたらの話と三笠さんからの情報と実際見た上での判断だけど」

「……」

「現時点で好意がまともに伝わってる確率自体低い。底辺。やたら溜息ついてた理由の八割あんたらの奇行が原因つてのが三笠さんの見解。いきなり猛勢かけたもんだから状況についていけないっばい」

「」「」「」

「三笠さんの見解の方は信じるも信じないも好きにすればいいけど、多少は信頼できると思ったから伝えとく。まあ人間観察が趣味とか公言してるし、意図的に間違いを言ってるんじゃないやなきや信憑性はあると思うけど」

「いや、いくら俺でもワザと嘘は言わないって」

「絶対にそつだと言えるほどにあなたを知らないの。お気を悪く

「したらすみません」

「それ、あんまり心籠もつてないよな？ ……まあ、さつき知り合
ったばかりじゃしょうがないか」

「……え、えつとー……？」

「思考を止めるな馬鹿ユズ。二度は言わないからな」

「つまり、私たちの行動は現状全くの無意味になっている、と？」

「全くとは言わない。ただ基本マイナスに働いてるだけで」

「……それ、いつそ無意味な方がマシだよね」

「だろうね、いろんな意味で。……正直、あんたらがここまで馬鹿
というかがキというかいろんな意味でダメダメだと思ってなかった
から、予定が狂った」

「予定？」

「さくつと現状把握、後にとりあえずの助言だけしてオサラバ」

「嬢さん、それつまりさつさと帰る気満々だったってことじゃ？」

「だってさつさと帰るつもりでしたから。そもそもなんで他人の恋
路のために転校までしなきゃならないのかっていう……あ、思い出
したらムカついてきた」

「薄々そうかなーと思ってたけど、嬢さんもしかしてそのためだけ

に転校してきたワケ？」

「相談受けてアドバイスしたら投げやりだとか不満言われて勝手に転入手続きされてたんですよ」

「……ごめんその繋がりがよくわかんないんだけど。なんでアドバイスから転入に流れてったんだ？」

「それは私でなくその四馬鹿に聞いてください」

「いや、キミ説明が面倒なだけだよな？」

「そうだけどそれが？」

「……。ええと、簡単に言えば『もったきちんとしたアドバイスを継続して貰えたら嬉しいし、ついでに長く一緒に居られるから一石二鳥』みたいな流れで」

「これまでことごとく断られてきてたし、いつそ実力行使してみてもいいんじゃないかな、とか」

「……えっと、そんな感じ？」

「なんつーか、聞けば聞くほどあんたら嬢さんのこと好きすぎねえ？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あ、あはは？」

「え、ナニその反応」

「深くつつこまないでやってください、三笠さん」

「は？……………まあ嬢さんがそう言うなら」

「で、話を戻しますが。思った以上にヒドイ現状だったから、ちよっと考えを改めることにした」

「え？」

「放つとくにはちょっと不安すぎる。あんたらが暴走したりいろんな意味で取り返しのつかない事態に陥ったら　というか陥らせたら目も当てられないし。相手の子に申し訳なさすぎる。ってことで、仕方ないからしばらくアドバイザーやることにしようかと」

「……………それホント！？」

「こんなことで嘘言っただけにする」

「つまり、このままこの学園に通ってくれるってことですか？」

「いやそれは未定」

「……………！」

「そんなあからさまにショックを受けた顔しなくても。別に積極的に拒否したいっていうわけじゃないから」

「じゃあなんで未定だなんて、……もしかして」

「多分あんたが想像してる通り。すっかり忘れ去ってたってわけじゃないみたいだな。さっきメールが来た。こっち向かってるって。……っていかお前らがまさか何も言わずに転入手続きだのなんだのやったとは思わなかった」

「……一応、奏さんには了解を得ただけど」

「いやそこは別物だから。そっちの了解が取れたからって関係ないから」

「……ですよね……」

「ごじりする？」

「ごじりしましゅうね」

「え、どうするの！？　っていかどうすればいいの？！」

「無駄に騒がないでくれる？　ユズ。鬱陶しい」

「なんか今日オレ暴言吐かれる率高くない！？」

「……………」

「レンリ、慰められると余計ショックなんだけど……！　やっぱり

気のせいじゃないってことだよね！？ ショック……っ」

「なんか場がカオスになってきたけど、何があるっての？」

「あいつらが意図的に連絡を怠った人物が来るっただけです。まあその人物が問題というか曲者なんですが」

「へえ？ 俺も会ってみたいんだけど、いい？」

「別にいいですよ。ただあんまり口を挟まないでくだされば。これ以上事態をこじれさせたら本当にメンドいことになるんで」

「……嬢さんさあ、俺を愉快犯なんかだと思ってない？」

「すみません。よく似た人が事態を引つ掻き回してこじれさせる天才なので、つい」

「『みつちゃん』だっけか。知り合いでもなんでもねえけど、恨み言の一つも言いたくなってきたな……」

「実際会っても言わないでくださいね。面白がられるだけなんで」

「……………了解」

兄登場。

「ところで、なんか静かだと思ったら特別講師の兄さん何してんの？」

「ああ、あれは気にしないでください。なんかスイッチ入ったみたいで」

「スイッチ？」

「いわゆるトランス状態というか、異様な集中力を発揮中というか」

「『神様が降りてきた』ってやつ？」

「多分そんな感じだと　って、あ」

「お前たち、俺のいない間に好き勝手してくれたようじゃないか」

「うえっ!？」

「……兄さん」

「うわ、来ちゃったよ……」

「想像以上にお早いお越しでしたね。……結局どうすべきかも結論が出ませんでしたし」

「……頑張るしか、ない」

「わが妹よ、よもや奴らに傷物にされていないだろうな。まあどちらにしろ今すぐ帰るぞこの奴らの巣窟から一刻も早く離れるべきだ」

「相変わらずですね、お兄さん」

「黙れ誰が兄と呼んでいいと言った。俺を兄と呼んでいいのは一人だけだこの腹黒が」

「来てすぐ帰るって、何しに来たの、兄さん」

「迎えに来たに決まっているだろう！ この馬鹿どもに拉致られたと聞いて気が気じゃなかったんだぞ！」

「人聞きが悪いですよ。拉致なんてそんな」

「しらばっくれるな、というかお前は妹の半径一メートル以内に近づくな歩く猥褻物め」

「……猥褻物……」

「ミスミ、ショック受けるのはわかるけど、いつものことだよ」

「それよりどうやって説得するかが問題だと思っただけど！」

「まず、話を聞いてもらえるか、が……」

「っわ、……ちよっと、兄さん」

「さあ帰ろう今すぐ帰ろう俺たちの我が家に」

「お兄さん、その体勢でその言い方は何か誤解を招きます」

「何の誤解を招くと言っんだ」

「体勢的に人攫い、台詞的には新婚さんのようです」

「……新婚か……それも悪くないな。しばらく休暇が取れたんだ、二人で甘い蜜月を過ごそう」

「……見事に前半はスルーしたね」

「兄さん、それは妹に言う台詞じゃないから。とりあえず下ろして」

「何故だ。久方ぶりに会った妹を今すぐ連れ帰りたいという兄の心がわからないのか」

「いやわかるわからないの問題ではなく。初対面の人がいることに気付いて。今更だけど」

「初対面？ 何だ、奏の知り合いのお花畑脳じゃないのかアレは。確かに実際会うのは初めてだが、気にすることもないだろう」

「いや、スイッチ入ってトリップしてるから浅見さんは別にいいんだけど、もう一人が」

「もう一人？」

「ほら、そこにいる」

「あの年から年中ヘラヘラフラフラしてる頭のネジ根こそぎどこかにやった変態を想起させるガキのことなら存在を認めていない」

「……兄さん、受ける印象が似てるからって混同するのはどうかと思っ」

「……………」

「あの人の性質は悪くないから。そこそこ常識人みたいだし」

「えーと、嬢さん？ それ何気に貶してない？」

「……む……お前がそう言うなら」

「わかったなら下ろして」

「だが、」

「下ろして。話がしにくい」

「……またスルーか嬢さん……」

「……仕方ない。わかった」

「……とか言いながら下ろしてなおがちりホールドしてるのは何ですか、お兄さん」

「お兄さんと呼ぶなと言っところっが」

「兄さん、苦しいから腕緩めて」

「ああごめんな。つつい力が。お前がいつこのケダモノどもに襲われるかと不安で不安で」

「それはないから安心して。こいつらちゃんと別に好きな人が居るから」

「いや、男は文字通りケダモノだ。心がなくてもお前の愛らしさによるめてやるだけやっておさらばなんてことも」

「兄さん、ここ学校だから。教育上よろしくない発言は控えてね」

「っていつかオレたちそんな風に見られてたの!？」

「ユズ、違う。兄さんは世の中の男ども全員そうだと思ってるだけ。それと兄さん、前から言ってるけど一回眼科に行って検査を受けてきたほうがいいよ。もしくは脳外科。身内鼻肩だとしてもちよつと異常だから」

「そんなことはない！ お前は宇宙一愛らしい」

「……なんで宇宙なの、とか突っ込んじゃいけないんだよね？」

「だろうね。まあいつものことだけど」

「溺愛っぷりに磨きがかかってますねえ」

「……それ、あんまり……歓迎できることじゃ、ない……」

「そうですね。それはつまり、妨害がより一層強まるってことです」

「何をこそそ喋っている。我が妹を再びかどわかす算段でも立ててるのか」

「いや、奴らに誘拐された覚えは一度もないんだけど」

「俺の把握しないところで転校だのなんだのさせた時点で誘拐だ」

「いやそれは何か違う気がするんだけど」

「だから帰るぞ今すぐ帰るぞ。そして我が家で思う存分二人だけで過すぞ」

「……そこはかたなく犯罪っぽい香りがする気がするの俺の気のせいじゃないよな？」

「気のせいじゃないですけど、これが通常なんですよ」

「ベタ甘も通り過ぎた何かになってるからね……」

「話聞いてもらつてごるじゃないけど、ホントどつするの？ 正直勝てる気がしないんだけど……」

「……為せば、為る？」

「ど、いいですけどね。はあ……」

当事者ほど落ち着いているのもよくあること (前書き)

注意

これまでのノリからかけ離れたシリアスが挟まれます。
コメディにシリアス求めてないよ、という方は回避推奨。

当事者ほど落ち着いているのもよくあること

「とりあえず。ちょっと話聞いて、兄さん」

「……………」

「すごい顔になってるけど、落ち着いて。ちょっと話そう。隣のよくわかんない部屋借りるけどいい？」

隣

「休憩室のこと？ いいけど……………」

「明らかに教室付属の休憩室とか何であるんだとかつつこみたいけど今は止めとく。兄さん、行こう。あんたらはついてくるなよ」

「……………そこまで空気読めなくはありませんよ」

「一応釘は刺しとかないと。じゃ、またあとで」

+ + + + +

「嬢さんたち行っちゃったけどいいわけ？ 説得するんじゃないかかったのか？」

「あの状態じゃ、話聞いてもらえませんか。宿めてくれるつもりのようにだし、邪魔をするわけにはいかないですから」

「……？　なんかアンタら揃って妙に沈んでるけど、何かあったのか？」

「君には関係ないよ」

「いや、まあそうだけどさ。なんでいきなりそんな神妙な感じになったのかとかは気になるのが人間ってヤツだろ？」

「気になるからって他人の事情にズカズカ踏み込もうだなんて、思慮に欠けるね」

「カンナっ！」

「何、ユズ止めるつもり？　なんで無関係の奴に気を遣わないといけないの。僕が元々こういう人間が嫌いなの知ってるよね」

「　口調」

「……っ！」

「レンリも、そんな怖い顔しなくても……」

「放っておいた方がいいですよ、ユズ。二人ともちよっと冷静さが足りてないみたいですから」

「ミスミまで……」

「……あー。えーと、何これ、もしかして俺のせい？」

「違うよ。きつかけではあったかも、だけど……」

「……よくわかんねえけど、ちょっと気になっただけで本気で首つっこむ気はなかったんだって。今更言っても遅いけど」

「……。……そんなの、最初からわかってたよ」

「……」

「……」

「……」

「……」

+ + + +

「……兄さん」

「言うておくが、あいつらに謝る気などないからな」

「わかってるよ。謝って、って言つつもりもない」

「……」

「でも、あまりあいつらを苛めないでやって。兄さんのほうが年上なんだから、大人気ないことしない」

「だが、」

「もう時効なんだって、あのことは。そうやって兄さんが苛めるから、あいつらはいつまでも気に病んじゃってるんだし」

「……いつまでも気に病めばいい。それだけで我慢してやるって言っただ、むしろ感謝されても良いくらいだろう。本当は一度とお前に近寄らせたくないというのに」

「兄さん……」

「直接の加害者でなくとも、あいつらが原因の一端を担ってるのは事実だろう。それを理解できる頭がありながら、お前の傍に居続けようとするのが気に食わない」

「兄さんの心配もわかるけど、私はもう子供じゃない。自分のとった行動の責任は自分で取れるよ」

「……それでもお前は俺の可愛い妹で、家族だ。心配をして何がいけない」

「いけないなんて言ってない。心配してくれるのは嬉しいよ。……でも、あいつらにだって、先に進む権利はあるから」

「……」

「それにちょっと協力するくらいは良いでしょう？　ここに入れられたのもその一環だったんだし」

「……強制的に、だったんだろう」

「まあ、それはそれとして。ちゃんと自分で怒ったから別にいいか
なって。多分色々不安定になっちゃってるのもあったんだろうし」

「『好きな子がいる』とか言っていたな」

「そう。色々聞いたし、実際にも見てみたけど、本当に普通の子だ
ったよ。普通の、可愛い女の子」

「『普通の』、か」

「『普通の』、だよ」

「放つとくより、手助けする方が私の精神衛生上も良い。まあ、
悪いことにはならないだろうと思って」

「……もう、決めたのか」

「うん、決めた。ごめんね、兄さん」

「奏は、許可を出したんなら、認めるってことか」

「これから先を考えて、なのかもね。あいつらがどうやったって、
奏兄さんが納得しなきゃ転校なんて無理だっただろうし」

「で、俺は『釘』だったわけか」

「そうだね。多分」

「俺もだが、あいつも十分前に進めていないと思うぞ」

「奏兄さん、隠すのだけはうまいから」

「……そうだな」

「兄不幸な妹でごめんね、兄さん」

「いや、……俺たちが、いつまでもあの頃と同じなつもりでいるのが悪いのはわかってる。だが、どうしても、な」

「本人より周りの方が、っていう良い見本だね」

「本当に、な」

やる気と気合は空回る（前書き）

前話をとばしても問題はないはずですが、会話に多少の違和感を感じることがあるかもしれません。

やる気と気合は空回る

「あれー？ 何この空気」

「ようやく現実にお帰りですか浅見さん」

「あ、女神おかえり〜」

「意識をどこぞにとばしてた人間におかえりなんて言われるとは思いませんでした。ある意味色々すごいですね」

「えへへ〜そんな褒められると照れちゃうよ女神っ」

「……奏から聞いてはいたが、なんだこの脳内お花畑っぷりは。頭にはプリンでも詰まってるのか」

「プリンおいしいよね〜。女神、今度作って？」

「さすがにプリンは詰まってるないと思うよ兄さん。あと浅見さん、それは市販で我慢してください」

「え〜……って、そういえばこの人、なあに？ 奏ちゃんのドッペルさん？」

「なんでそんな方向に行くんです。奏兄さんから聞いてませんか、『弟』の話」

「奏ちゃんの話って九割女神のことだからなあ。聞いたかもだけど忘れちゃった」

「……外でも相変わらずのようだな、奏は」

「いや、流石に浅見さん辺りにしかそういう面は見せてないといいいんだけど」

「まあいい。それより、背後でウロウロソワソワしてる目障りな奴らを叩きだしていいか」

「いや兄さん、ここあいつらの教室だからね」

「ではさっさと出て行くか」

「ま、待ってくださいお兄　　じゃない、深さん!」

「………………。何だ。用件をとつとと簡潔に端的に言え」

「え、ええと、その　　」

「あなたが私達に隔意を抱いているのはわかっていますが、こちらにも事情があります」

「連れて帰られると、困る……」

「オレたちのワガママだつていうのはわかってるし、ムシの良いこと言ってるのもわかってるけど　　絶対、守るから!」

「危険な目には遭わせないし、もし万が一そんなことが起こったら、

連れて帰ってくれていいし」

「もちろん、彼女の意思が最優先、ですけど……」

「……お願い、します」

「……」

「……ワガママって自覚あったのかとか何気の上から目線だなとか最初にヒトの意思無視した振る舞いしたのお前らだろとかつつこみたいことは多々あるが、まあいいやもう。　で、兄さん」

「……」

「一応、こいつらだって昔のままじゃないし成長はしてるってのはわかった？」

「……まあ、な。まだまだクソガキなのには変わらないが」

「まあ兄さんからしたらそう見えるのは仕方ないよ」

「何せ俺はこいつらが心の底から嫌いだからな」

「そんな得意げに言うことじゃないと思うけど……まあ、そうだね」

「そんなやつらが通う学校に可愛い可愛いお前を置いておくのは心の底から嫌なんだが」

「でもどうせ三日と空けずに出没するし。それが毎日になるだけだ

」

「一日の半分以上をこいつらと過ごすかと思うと羨ましさでどうにかなりそうなんだが」

「兄さん、その発言は色々アウトだと思うよ」

「だが、お前がいいと言うなら仕方ない」

「っ、深さん……それって」

「非常に不本意だ。どうして世の中はこんなに理不尽に満ちているんだ。何が悲しくて愛する妹を狼の群れに放り込まねばならない？
こんなに、こんなに可愛いのに何かあったらどうしてくれる」

「兄さんはやっぱり一度眼科行ってきた方がいいと思う。もしくは精神科も考えた方がいいかも」

「お前が一日付き添ってくれるならそれもいいかもしれない」

「……………筋金入りのシスコンなのな、オニイサンって」

「誰が兄と呼んでいいと言った」

「訂正。『嬢さんのオニイサン』って」

「いいか、何かあったらすぐに連絡しろ。問答無用で連れ帰ってやるから」

「兄さん、心配してのことはずなのにそこはかたなく無理やり感が漂ってるから、その台詞」

「『嬢さんの』ってつけたらOKなのな……っつーかまたスルーされてるよな俺」

「あはは〜みんな固まっちゃって面白い〜。信じられなさすぎて思考がショートしちゃったみたいだねえ。彫像みたい」

「浅見さん、あちこち手当たり次第につついたり触ったりするのやめてやってください。彫像みたいになっても一応生身の人間なんですから」

「いつそ間抜け面を撮って好事家にも売りさばいてやればいいんじゃないか。こいつらは見た目だけは立派で観賞に耐えうるからな。俺の憂さは晴らせるし奴らは辱められるしで一石二鳥だ」

「流石にそれは止めて、兄さん。犯罪はちょっと。あとそれって一石二鳥とはちょっと違うと思う」

彼らの独白

なんか、まだ夢見てるみたいな気持ちだけど、現実ってことではないんだっけ？ いいんだよね？

やったー！ って、単純に喜んじゃ……多分、ダメなんだよね。正直、オレはよくわかんないんだけど、カンナたちが言うならそうなんだろっなあ。

深さんが来たときはもう詰んだ！ 終わった！って思ったけど……まさか意見変えてくれるとは思わなかった。どーいう心境の変化？ 難しーことってわかんないけど、とりあえずオレは単純なのが取り柄だし、素直に喜んでくことにしよう。

せっかく長年の夢が叶ったわけだしね！ これからが楽しみっ。

……とか言ったら、また『単純バカは気楽でいいよね』とか言われちゃうのかなあ。まあいつか。

何だか未だに夢でも見てるような心地なんですけど、これって現実なんですよね。何がどうしたんでしょう、本当に。

奏さんが割合あっさりOKしてくださった時から嫌な予感はしていましたが……絶対何か裏がありますよね？

大方、叩き落とすための前準備なんでしょうけど、チャンスはチャンスです。せっかくですから、活用するとうましよう。

どこまで許されるのかはわかりませんが、まあ、やれるだけのこ

とをやるしかないですかね。

ユズはよくわかってないですし、カンナは神経質になってますし……レンリはレンリで、最近考えが読めないんですよねえ。『どうしたいか』は多分みんな一緒なんでしょうけど。

エゴでも何でも、私たちが彼女を手放したくないのは間違いないんですし、ね。

てのひらで転がされてるなって、わかってても。

どうしようもない、のかな。

……一緒にいたってだけ、なのに。なんで、うまくいかないんだろう。

赦し、なんて、今更求めてないけど。……あ、でも、多分、カンナは赦されたいの、かな。

今回も、一番の問題は、カンナのところみたいだし。

きつと、ゆるされるから　ゆるされてしまっつてわかってるから、カンナは怖がってる、のかも。

みんな、それぞれ、どうしようもなく　それでも、もし叶うならって思ったから、『今』があつて。『これから』があつて。

きつと正解なんてないから、間違ってるかもしれないけど、選び続けるしかないのかもしれない。……後悔だけは、しないように。

……正直、うまく行き過ぎて逆に不安って言うか、いや、別にう

まくは行っていないんだけど、要所要所で予想が裏切られてるのが不吉な気がする。

どうせ、わかっててのことなんだろうけど。少なくとも奏さんは、何か企んでるんだろう。

僕たちが僕たちである限り、人並みの幸せを望むなんて許されないんだろうってわかってる。

……それでも望んでしまうのは、彼女と出会ってしまったからだ。出会わなければ良かったなんて思えないし、きつと他のみんなも同じで、それが免罪符になるだなんて思ってないけど、出会ったものは仕方ない。

出会ったことが良かったのか悪かったのかはわからないけど、少なくとも、変化をもたらすのは確かだ。

きつと、これから先の僕たちの行動が、良いか悪いかを決めるんだろう。

だったらせめて、後で悔やむことがないように。

……できるのは、多分、それだけなんだから。

予想外の人には会っし、計画は変更せざるを得なくなるし、わりと目まぐるしい一日だった気がしないでもない。

でも、まあ、そろそろ荒療治が必要かなとは思ってたし、ちょうどいいのかも。

そもそも、誰も彼も気にしすぎなんだよ。もうちょっとどうにかならないのかあれ。

周りが格段に女々しいだけなのかもしれないけど、うつつしいには変わらないし。いい加減うざい。

関わるなら中途半端は良くないし、……仕方ない。あの人にも協

力願おうかな。ちょっと不安だけど、適任なのはあのくらいだし。

……まあ、あと。

思惑通りに動くのは癪だしね。たまには意趣返しくらいやらせてもらいますよ。巻き込まれた側なわけだし。

『いつもと違う真剣な彼にドキッ!』なイベントが起こったようです。(前書き)

ベタを通り越してベッタベタもいいところ。報告者はユズ。

『いつもと違う真剣な彼にドキッ!』なイベントが起こったようです。

「聞いて聞いてー!」

「何をだ。っつーかうるさい」

「冷たいっ! まあそれはともかく、聞いて聞いて!」

「だから何をだ。そこに座って三回深呼吸して声量を落とした後なら聞いてやる」

「わかった!」

(深呼吸中)

「よし三回! あのねあのねっ! 目が合った!」

「……は?」

「誰か来たなとは思ってたんだけど稽古中だからそっち見れなくて! 稽古終わって気配する方見たらあの子が!! オレのこと見てくれてたってことだよね!? しかも目が合ったんだよ?! すごく

ない!？」

「とりあえずもう1ランク音量落とせ。あと順序立てて話せ。二度言わせるなよ?」

「……うゝごめんなさい……」

「わかればよろしい。で?」

「今日の朝、久しぶりに学校の武道場で稽古したんだけど、途中で誰かが覗いてて」

「うん」

「何か知ってる気配っぽかったから、気になったけど区切りつくまでそのままにしてて」

「うん」

「稽古終わって誰が覗いてたのか確認したらあの子だった上に、目が合ってちょっと調子に乗りすぎましたごめんなさい」

「いや別に二回も謝らなくてもいいけど。もし次やったらそれ相応に対応するだけで」

「ホントごめんなさい……!」

「しかし、朝稽古か……」

「……な、なんかまずかった?」

「いや？ 多分あなたにとってはよかったんじゃない」

「え？」

「あなたが傍から見て真剣に見えるのって、稽古とか試合中くらいだし。多少は印象良くなったかもよ」

「それってオレがいつもは真剣に見えないってことだよな？」

「否定はしない」

「そこは否定して欲しかったです！」

「無理言つな」

「え、無理なの……？」

「無理。無い袖は振れないんで……まあよかったな？ 目を逸らされる状態からは脱却できそうだし」

「うん！ 脱却できるように頑張る！」

「頑張るな。逆効果だから」

「ええええ！？ オレのやる気全否定！？」

「否定はしてない。ただ『目を逸らされる』から『避けられる』にクラスチェンジしたいとかじゃないならやめとけっただけで」

「わかったやめます！」

「そうしてけ」

「……」

「……」

「……何もしちゃダメ？ こっちから近付いちゃダメ？」

「二度は言わせるなっつっただろうが」

「……ごめんなさいもう言いません！」

「このトリ頭が。全力で懐きに行ってドン引かれた後なんだから自重しろ。もう一回引かれたらもう知らないからな？」

「そ、そんなこと言わないで！ 見捨てないでー！！」

『予想外のスキップにドキッ！』なイベントが起こったようです。

(前書き

セクハラかどうかは個人の感性による。報告者はミスミ。

『予想外のスキンシップにドキッ!』なイベントが起こったようです。

「どうでしょう」

「何が。っつーかいきなり現れての第一声がそれか」

「すみません、ちょっと動揺してまして」

「ああそう。別に聞きたくないけど聞いてやる。どうした」

「実は、さっき『彼女』と接触がありました」

「まさかお前も目が合ったただのなんなのじゃないだろうな」

「え、目ですか。合いましたけどそれが？」

「……いやいい。気にするな。お前がたかが目が合ったくらいで動揺するはずなかったな」

「自己完結されると気になるんですが。　　というかそれ、ユズの話ですかもしかして」

「」名答。よくわかったな」

「私たちの中で、目が合ったただけで報告に来るようなのはユズくらいでしょう。レンリは微妙なところですが、あなたが呆れ気味だったので違うと判断したままです」

「言われてみれば。で、あんたは何があつたわけ」

「ついうっかりキスしてしまいました」

「……よし歯アくいしばれ。オイタした野郎にはそれくらい当然だよな？」

「え、いやちよつと待ってください」

「誰が待つか。ああいや待ってやってもいい。その代り殴るのはゴズにやってもらうか」

「あなた容赦する気ゼロですね!？」

「容赦する気があると思つたならそつちのが驚きだつての。うかつでアホでバカなことやらかした自覚があるなら大人しく殴られる。あとはもう知らん」

「いや本当待ってください！ キスって言っても口にじゃないですよ!…!」

「じゃあどこにやつたキリキリ答える」

「頬です親愛です決してやましい気持ちでやつたわけじゃないんです!」

「その判断は前後関係わかってからじゃないと何とも。何がどうしてそんなことになつたの」

「……ピアノを弾いてたんですよ」

「ピアノ？」

「この学園の音楽室びやうしつっていうのは複数あるんですが、そのうちの一つに音楽関係者垂涎のグランドピアノがありました」

「まあカンナのそこだしそれはありそうだけど。それで？」

「たまに弾かせてもらってるんです。本来生徒用に開放しない部屋なんですけど、カンナに頼んで」

「回りくどい。とつとと肝心のところ話せ馬鹿」

「間違つて迷い込んできた『彼女』があんまりにも無邪気に私のピアノを褒めたので嬉しくなつて感謝を伝えようとしてうっかり」

「前言ったよな？ 日本じゃ基本的に親しくない人間からのスキンシップは好まれないつて。そりゃもう何回も懇切丁寧に教えてやったよな？」

「……はい。覚えてます」

「なのになんでこんなことやつたわけ。家族間でやるのは構わないけど他はやめとけて忠告したよな？」

「浮かれてまして……すみません」

「謝る相手が違う。あっちの反応はどうだったわけ？ まあ最初のあんたの様子からして深刻なことにはなつてないと思うけど」

「顔真っ赤にして走り去られました」

「だろうね。で、あんたは何に動揺したっての」

「あなたの忠告をすっかり忘れるくらい浮かれてしまった自分ですとか顔真っ赤にして涙目になってるの見てやってしまったと血の気がひいたのは確かなのに可愛いとかもつと見ていたとか思ってしまった自分ですとかつまり自分が制御できてないことに驚いたというか何というか」

「……よしわかった、とりあえず脳内お花畑もとい頭の中がピンクなのは一人で充分だからそれ以上はやめる。ネジどこに落つことしてきたんだこの馬鹿。あと頬染めるな気持ち悪い」

「……あなたのソレでちょっと落ち着きました。もう少しクールダウンしたいのもう一度罵ってもらっていいですか　って痛っ！？」

「その発言がいろんな意味でアウトなことに気付いてない時点で落ち着けてないだろうがこの馬鹿。呆れるの通り越して鳥肌立ったんだけどもう放置していい？」

「すみません自力でクールダウンするので見捨てないでください……！！」

『寝ぼけた彼の勘違いでドキッ!』なイベントが起こったようです。(前書き)

普段がアレなので大概のことは許されるタイプかもしれない。報告者はレンリ。

『寝ぼけた彼の勘違いでドキッ!』なイベントが起ったようです。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………なんかいつもにましてばーっとしてるみたいだけど何かあった?」

「……………さっき、5限目の時間」

「うん」

「中庭で、日向ぼっこしてた……………んだけど」

「うん、……ってナチュラルにサボり発言は駄目だろ」

「……………」

「いや謝られても。直接は関係ないし、それってどうなのとは思いますが怒ってはないから。まあとりあえず続けて」

「……気持ち良くて、眠って」

「……………」

「目が、覚めたら……あの子、ぎゅーってしてて」

「は？」

「困ってたみたいだった、から。離れたら、ふらふらしながら歩いて行って。……顔、赤かったし、体調悪かった……のかな、って」

「いやいやいや。ちょっと待て整理させて」

「……？」

「まず。目が覚めたのはいつ頃」

「多分、5限目の休み時間……か、6限目始まってすぐ、くらい」

「ぎゅーってしてたとか言ったけど、その前後を詳しく」

「……詳しく？」

「詳しく。起きる前とか起きた後とかでなんか覚えてることは」

「……猫」

「猫？」

「一緒に、寝てた。のに、いなくなってた。……抱いてた、つもりだったけど。いなかった。『かな』はいたのに」

「それまさか猫の名前か」

「……ダメ？」

「駄目っていうか何ていうか、もしかして身近な人間の名前手当たり次第につけてるんじゃないだろうな」

「5匹だけ……だけど。ダメ……？」

「……。『かな』の時点で3匹は確定として、残り2匹のうちどつちかがその子の名前だったり一緒に寝てたけどいなくなったのがその猫だったりしないよな」

「すごい……。なんでわかったの」

「あー、うん。とりあえず、」

「？」

「その子別に病気じゃないだろうから心配しなくていい。ただしばらく顔合わせたら避けられるかもだけど」

「……なんで？」

「自分で考え　てもわかないよなおまえは。でも説明するの面倒っつーかこつちが恥ずかしいからミスミあたりに聞け」

「ミスミ？」

「多分説明には一番適任だから。カナナでもいいけど」

「わかった」

「ただ、一つ言っていていい？」

「？ うん」

「目が覚めて好きな子抱きしめてた時点で色々気付いけ。病気かなとか心配する前に考えることがあるだろうが。っつーか突き飛ばされたりしないところがあんたのすごいところだよな……まあ抵抗されてても気付かなかった可能性はあるけど」

「よくわからない、けど。……固まっていた、と思う」

「……ああ、うん。だろうね。いきなり抱き寄せられたら固まるよね。あんた寝ぼけてる時表情筋緩いし」

「それ、……何か、関係ある？」

「多分だけど。……しかしアレだな、おまえらって顔がいいから許されてるところ結構あるよな」

「……？」

「わかんないならそれでいいって。セーフなのかアウトなのかはされた本人にしかわかんないし。セーブさせた方が良くないかとは思わないでもないけどもうなんかメンドい。なんなのおまえら。個人の許容範囲の限界にでも挑戦してんの」

「……その、よく、わからない、けど。ごめん……」

「わけわかってないのに謝られてもねえ。っつーか本当相手に同情するよ。あんたらに遭遇するたび精神の消耗半端なとそつだよね可哀想に」

『いつもと様子の違う弱った彼にドキッ!』なイベントが起こったようです。

何気ないぬくもりと言葉の威力は絶大です。報告者はカンナ。

『いつもと様子の違う弱った彼にドキッ!』なイベントが起こったようです。

「なにあれ純粹培養にもほどがあるっていつかどいつ育て方したらあんな子に育つのかな」

「いきなりどうした」

「さっき、植物庭園で」

「……予想はしてたけどやっぱりおまえもか」

「やっぱり?」

「気にするな。続けて」

「『彼女』に会ったんだ。奥にある、ガラス張りの温室でなんだけど」

「ホントこの学園何でもあるな。……で、あんなに動揺するとか何があったわけ」

「……」

「……」

「……ええと、その、」

「……………」

「あの、ええと……………」

「……………ああっん、とりあえずその顔で何となくわかった」

「……………っ、僕どんな顔してた!？」

「言葉で形容できないような顔。とりあえず悪いことがあったんじゃないのは確実にわかる顔」

「……………」

「まあ、あれだ。ひとまずよかったねと言っておいてやる。今朝会ったときよりマシな顔してるし」

「そうかな」

「最近おまえ雰囲気とか顔つきから荒んでたし。どうせ家の方がごたごたしてたんだろっけど」

「……………荒んでた？」

「まあそれなりに。幼馴染たちがごぞつておまえの近況報告をしに来るくらいには」

「……………自覚なかったよ」

「だろっね。余裕ないなーってのは傍から見てもわかってたし、悪化する前に息抜きでもさせてやるかってことになってただけ。も

「う必要なさそうだな」

「久しぶりに、よく眠れたからかな」

「顔色がマシになったのはその辺が理由だろうけど。それだけじゃないよな？」

「……わかる？」

「ただか添い寝だか膝枕だかであんたがあそこまで動揺するとは思えないし」

「いやそこまですてもらってはなないよ」

「んじゃ、手を握ってもらったとかその辺か」

「……なんでわかるのかな」

「そりゃ、付き合い長いし。っつーかそもそもこの流れで選択肢ってそう無いし」

「君に隠し事はできないな」

「あんた他の奴らにだってできないだろうが」

「そうは思わないけど……君だからこそ、僕は動揺を外に出したよ
うなものだし」

「とか言いつつあんた結構色々バレバレだから。親しい人間にはわかる程度には自分をコントロールできてないってこと自覚したら？」

「……………」

「不本意そうな顔してるけど事実だし。情緒面に関してはあんたが多分一番未発達だよね」

「……………そう言われると色々複雑なんだけど」

「事実だから仕方ない。まあ発達したらしたで、あんたは生きにくそうだけど。そもそもあんた変なところ繊細だし」

「似たようなことを、言われたよ」

「『彼女』に？」

「うん。……………どうしてだろうね。君みたいに、僕と長い付き合いってわけでもないのに」

「そういう子なんだろ。当たり前他人の心を思えるってだけの」

「そっか。……………うん、そうかも」

「だからあんたもあいつらも、あの子が気になるんだろうし。まあそれがいいか悪いかは別として」

「……………確かに『彼女』にとっては良いことって言いきれないかもしれないけど、そうやって言われるとさすがに僕も傷つくよ？」

「そりゃ、多少傷つくように言わないと釘にならないし。言われたくなきゃもうちょっと色々自分でセーブできるようになりなよ」

「反論できないのが痛いな……。善処するよ」

「是非そうして。んでこっちの手間減らしてくれば尚良い」

「……本当、君って容赦ないよね」

危険から守るためとしてもそれはアウトです。(前書き)

プライバシー侵害とかそういうレベルじゃない。相談者はカナナ。

危険から守るためとしてもそれはアウトです。

「これは真剣な相談なんだけど」

「そもそもふざけた相談したいと言われてたら聞く気失せるっつの」

「ごめん、言葉のアヤというかなんというか　とりあえず意見を聞きたいんだけど」

「なに」

「自分の行動を逐一把握されてるっっていうのは、『一般人』的にセーフ？　アウト？」

「いやアウトだろそれは」

「本人は絶対気付かないって前提があるとしても？」

「あるとしても、だ。っつーかちょっと考えてみるよ万が一それが本人に知られた場合を。ドン引きだろ犯罪者だろよくてストーリーカードろ？」

「そうかな」

「そうなの。っつーかそれ聞いてくるっつことはやっぱりおまえちゃってんのか」

「……やってただけど、やめた方が良いのかなって」

「悪いことは言わないからとっととやめとけ」

「じゃあこっさりボディガードつけるのもやめた方が良いかな」

「……あー。それは微妙。現在の状態による。今危ないわけ？」

「うん、少し。微妙なラインかな、とは思っただけど」

「念のためってことか。だったらそんな本格的なやつじゃないだろうし、まあいいんじゃないの。プライベートの侵害にさえならなきゃ ってさすがにそれでボディガードは無理か」

「そうだね」

「ああもうあんたんとこメンドくさいな！ なんでボディガードが必要な事態になるわけ？」

「それは、資産に目が眩む馬鹿が多いからだよ」

「冷静にコメントされるのもムカつくな。とはいえとぼっちりがいくのもね……」

「そうなんだよ。僕としてもそれは不本意だし」

「手エ出してきたそつな馬鹿の目星はついてるんだよね？」

「……ついてるよ。ただ……」

「ただ？」

「僕のところはともかく、他はちょっと把握できてるか自信がない。動きがあったら調べさせてはいるんだけど、学園関連も結構あるみたいで」

「『金持ちで超エリート』な生徒さんたちも動き出したってわけか」

「そういうことかな。実際に動き出す前に退学させるとかはさすがに無理だし」

「……本当、おまえらの周りってメンドくさいな！。もういつそもつと環境いいところに転校させてやった方がその子も幸せなんじゃないの」

「それができるくらい出来た人間なら、そもそも好意を抱いた時点で自分を戒めてるんじゃないかな」

「まあそうだろうけど。……とりあえずやりすぎないように。社会的抹殺　はやりすぎか。ちよつとした転落人生くらいで勘弁してやりなよ」

「容赦する必要なんてないと思うんだけど？」

「人は一人で生きていけるイキモノじゃないからね」

「……どういう意味？」

「あなたにあいつらがいるみたいに、あなたが『彼女』を大事に思

うみたいに、そいつを大切にする誰かもいるかもしれないってこと。逆恨みも復讐も、まあ可能性としてはあるわけだし」

「……なるほど」

「わかってもらえたなら何より。　　っつーかなんでんなへヴィな話まで聞かなきゃならんのだ」

「だって、アドバイザーやってくれるって言ったから」

「確かにするとは言ったけどさ、……まあいいや。あんたらには今更だよな」

「言いかけて止められると気になるんだけど」

「気にするな」

「……気になるけど、うん。気にしないことにするよ。なんとなくその方が幸せな気がするし」

「おまえ妙なところ勘がいいよな」

「君はそういつところ、容赦ないっていつかオブラートに包む気ないよな……」

とどのつまりわりと普通の接触なのでセーフです。(前書き)

その程度でアウトだったら他の奴らは軒並みアウトに違いない。相
談者はレンリ。

どこのつまりわりと普通の接触なのでセーフです。

「……ちょっと、聞きたいんだけど、いい？」

「いいけどその仕草狙ってやってるんじゃないんだよなその歳
でしかも男で小首傾げるってどうよ。女でも天然でやるのって少な
いと思うんだけど」

「……？」

「あー、いい。気にしないで。で、なに？」

「話聞くのって、セーフ？」

「……。ごめんもうちょっと詳しく言ってもらわないとさすがに何
とも」

「最近……寝てると、たまに近くに居て。中庭、人来ないからかな
って思うんだけど」

「それはあの子がってことだよな？」

「うん。……で、たまに、暗い顔、……悩んでる？ 顔してて。た
またま、猫に話してるの、聞いて」

「……。うん」

「つい、思ったこと、言った……んだけど。よかったのかなって」

「とりあえず」

「？」

「それが駄目だとかアウトだとか言ったら私人でなしだよ間違いない」

「？ ……そう？」

「なんでそこで首傾げる。普通そうだろう。ってああそうだったあんたらに普通が通用しないからアドバイザーなんてやることになってたんだね。うっかりしてた」

「……」

「まあ会話の内容とかはつつこんで聞かないけど、あんたのことだから意見の押しつけも何もなく、単純に思ったこと言っただけなんだろうし、いいんじゃない」

「……でも、盗み聞き、だし」

「いやまあそれはそうだけど。その子がそれについて怒ったわけじゃないよね、その様子だと」

「驚いては、いたみたい……だったけど」

「まあぼろっと猫に漏らした本音だか悩みだかに返答があったら驚くわな。っていうかあんただけ存在感ないの」

「……」

「いやそこは真剣に考えなくてもいいから。別に答えは期待してないって。話聞いて、あんたが思ったこと言っつて、その子はどんな顔した？」

「……」

「……」

「……ちよつと、泣きそうだったけど。笑つてた」

「なら、それでよかつたんだと思つときなよ。何かがちよつと楽になつたのかも、くらいにさ」

「……それでいいのかな」

「いいんじゃない？ 干渉しすぎるのも気遣いすぎるのもアレだし。いやあんたはそれくらいの心持ちで他人と接した方が良くもしいないけど」

「……干渉……気遣い……？」

「いや真剣に考え込むな。多分あんたはそのままの方が良いって絶対。他との差別化的な意味でも」

「？ ……？？」

「うんごめん混乱させて。つまりあんたはそのまま癒し系やってた

方がいいよってこと」

「癒し系……？」

「そこから説明するのは面倒だしなんかアレだしごめんこつむる」

「……？ よくわからない、けど。わかった」

「わかんないまま返事するなよって言いたいけどいいやもつ。でもレンリはもうちょっと察しが良くなった方がいいと思う。っていうかアレだ、自分が他人から見えてどういう風に見えるかとか多少はわかるようになった方がいいって。カンナとミスミ ユズもその辺わりとわかってるか。他の奴ら参考にするなり聞いてみるなりして」

「……。頑張る」

「……。あー……うん。頑張れ」

「……？」

アウトかセーフかは本人に聞いた方がいいと思います。(前書き)

流石にそれは一概に言えないので答えられない。相談者はミスミ。

アウトかセーフかは本人に聞いた方がいいと思います。

「……」

「……」

「……」

「……えらく真剣に考え込んでるけどどうした」

「……あ。ああ、すみません。自分ではどうしても答えが出せない
ので、意見を聞かせてほしいんですが」

「なに」

「怪我した女の子を運ぶのに、どっという抱き方なら許されるん
でしょうか」

「……うん。とりあえずつつこんどくけど、運ぶのに抱くの一択
なのか」

「抱える、と言い換えた方が良かったですか」

「それ自分でも言ってるけど言い換えたただけだから。実質同じだか
ら」

「だって足を　ああ、言ってなかったですけど足を怪我した場合、

肩を貸すだけではやっぱり足に負担が掛かるのは避けられません。背負うのも、接触面が多い上にどうしても足に手を触れなければならぬからです。みだりに女性に足に触れるのは駄目でしょう」

「頬にキスするのに抵抗ないのになんで足に触るのにはそんな慎重なんだよ。意味わからん」

「親愛表現としてキスが当たり前の環境だったからですよ。知ってるでしょう?」

「ついでにあんたが日常生活で浮くレベルにフェミニストなものね。まあ、肩貸すのじゃ負担が掛かるのは同意だけど、あんたが抱くっと言うなら俗にいうアレだろうし　　っつーかいきなりそんなこと聞いてくるってことは実際そういう状況になっただんな?」

「実は、『彼女』が階段から落ちた瞬間に居合わせまして。抱き止めはしたんですが足を捻ったらしく、医務室まで抱いて連れて行っただんです。……どうも、様子を見るに横抱きは駄目だったようでしたから、それならどう抱けば良かったのかと」

「わーベタ。ある意味すごい。……横抱きってアレだよな、俗に言う『お姫様抱っこ』だよな?」

「はい。『お姫様抱っこは乙女の夢』だと聞いていたのですが、違うんですか?」

「あー、それはどつちとも言にくい。夢っちゃ夢なのかもしれなけれど、実際やられると色々気になるってのもあるだろうし」

「気になるとは?」

「説明させるな察しろフェミニスト」

「わかりました聞かないでおきます。……それで、どういう抱き方ならセーフだったんですか？」

「抱き上げる相手によるとしか。まあ正直横抱きが一番無難だと思うけど。安定感さえあれば」

「一応標準的な体型の女性一人抱えるくらいはできると自負しているんですが」

「ああ、うん。あんた見た目に反して結構力あるよね。楽器やってみるせいか知らないけど」

「物によっては結構な筋力が必要ですからね。前抱きはアウトなんですか？」

「体格差ないと厳しいだろそれ。密着率半端なくなるだろ」

「……言われてみれば」

「とりあえず、抱き上げるにしても一言相手に意見を聞くとかすればよかったんじゃないの？ あんたのことだし一言言って返答も聞かないまま抱き上げたとかだろどうせ」

「見てたんですか？」

「いや見てなくてもそれくらい想像つくから。焦ってても相手の意思を尊重するの忘れなきゃ大丈夫だと思うけど。多分姫抱きもアウ

トだったってわけでもないと思うし。単に恥ずかしかったんじゃないの」

「……まあ、恥ずかしがる様も可愛かったんですけどね」

「最後の最後に惚気るなよおまえ。なんか殴りたくなるから」

「殴っ……。それ理不尽じゃないですか？」

「こつちが置かれてる状況の方が理不尽だろ。アドバイスはともかく惚気を聞く義理はないってのこの馬鹿。とりあえずそのしまりのない顔をどうにかしてこい今すぐに」

気遣いの末の産物なのでそれはセーフです。(前書き)

守るためでもあるのでむしろ褒められるレベル。相談者はユズ。

気遣いの末の産物なのでそれはセーフです。

「ねえねえねえ聞いて聞いて聞いてー！ 相談っていつか判断してほしいことがあるっていつかー！」

「うっさい黙れなんで朝っぱらからそんなテンション高いんだおまえ」

「開口一番ソレってヒドくない!？」

「毎回言ってるがおまえはもっと落ち着きを持って。やかましい」

「……えーと、うん。ごめんなさい」

「わかったならいい。で、何があった？」

「え。聞いてくれるの?」

「いつものくだらん報告とはちょっと違いそうだから一応」

「くだらんってひどい……」

「はいはいゴメンゴメン打たれ弱いユズにはちょっと言葉が強すぎましたねー」

「棒読みだよねそれ?!」

「あーもういいから本題に行きなよ。まあ大体の予想はつくけど」

「え、なんで？ エスパー！？」

「違うから。つつーかいいかげん話すか話さないか決めるこの馬鹿」

「えっと、昨日ガラ悪い人たちに絡まれてたあの子を助けたんだけど」

「うん」

「仕方なかったんだけど腕掴んだり色々触っちゃったり抱きしめちやったりしてなんで女の子ってあんな柔らかいの壊れそうで怖いでも触れてうれしいとか色々ホントもうどうしようって思ったんだけど！」

「……ああ、うん」

「怖い思いしただろうなって思ったから護衛ついでに家まで送ったんだけど、セーフ？」

「まあセーフじゃないの。そのガラ悪いのがどんなだったかによるけど、男と居るのが無理ってくらい怖がってたならともかく、そういうんじゃないかな」

「それはないと思う！ オレのこと怖がってたならわかるし！」

「うん、その辺のユズの嗅覚は本当犬並みだしね」

「……それ褒めてる？」

「褒めてる褒めてる」

「……………」

「いやホントに。ユズの直感は信用してるから。野生の勘的な意味で」

「それなんか褒められてる気しない……………」

「今更深読みスキルなんて習得するなよメンドくさい」

「今のっ！ 今の本音だよね!？」

「本音だがそれがどうした」

「いつも通りで安心した……………」

「…………ユズ、あんたやっぱマゾ扱いされても文句言えないと思う」

「なんで?!」

「わかんないのが不思議なんだけど。今の自分の発言よく思い返せ。前後のやりとりと一緒に」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……。ごめんよくわかんない！」

「駄目だこいつ」

「速攻ダメ出し!?!」

「駄目出ししたくもなるつつーか、本当トリ頭もいいところだなおまえ。まさか自分の発言すら忘れたんじゃないだろうな?」

「わ、忘れてないよ……!?!」

「目エ見て言えこのトリ頭」

「…………ごめんなさい思い出せません!」

「…………なんかもうむしろ心配になってきた。あんたちゃんと生きていけんの?」

「た、多分?」

「疑問符つけるなよ自分のことなのに。っていつかそこ多分じゃ駄目だろ。疑問形はもっと駄目だろ」

「だ、ダメ?」

「駄目」

「……頑張ります……」

「ああうんガンバレ」

「投げやりな声援って逆に傷つくんだけど……！」

「あーごめんごめん悪かった。頑張れ？」

「うー……。……。あ。もう一個聞いときたいことがあるんだけど」

「なに」

「多分カンナのとこだと思うんだけど、あの子にボディガードつけてる？」

「なんでそれをこっちに聞く」

「知ってるかなって」

「……念のためだとかなんとかって聞いた。ンなやばいわけじゃないみたいだったけど、そのガラ悪いのって関係ありそうだった？」

「多分違うと思う。フツの不良さんだったよ？」

「不良さん……」

「え、なんか間違った？」

「いや気にするな。けど、一応他の奴らにも話しとけ。あ、触ったの抱きしめたのは言わなくていいから」

「了解ですっ！ えっと、じゃあ……何話せばいいの？」

「……ホントおまえあらゆる意味で馬鹿だな」

「そ、そんなしみじみ言わないで！ 傷つくから……！」

とある日、保健室で。（前書き）

幼馴染は登場しません。話し相手はあだ名だけ出ていたあの人。

とある日、保健室で。

「やほー。久しぶりだね妹ちゃん。今日も絶好調にご機嫌ナナメな様子で?」

「……ちよつと協力してくださいって言っただけなのになんでナチユラルに職員として潜り込んでるんですかあなた」

「面白そうだったから?」

「ですよねそれ以外ありませんよねあなたのことですから」

「さすが妹ちゃん。俺のことよくわかってるねー。愛だね」

「それはないです」

「恥ずかしがっちゃってー。それよりどう? 似合う? 白衣」

「ええ、腹が立つくらいに」

「そうまで言ってもらえるとあえて保健医選んだ甲斐があったなー。別に理数系の教師でもよかったんだけどさ。あ、深くんも似合うよね白衣。ラボに遊びに行ったとき見たんだけど」

「そうやってちよつかいかけるから深兄さんがあなたを毛嫌いするようになるんですよ」

「いやー、君たち兄妹の害虫を見るような目ってなんか癖になるよね」

「相変わらず変態ですね。救いがたいくらいに」

「イイね、もつと容赦なく罵ってくれていいんだよ？」

「ご期待には沿えませんのでそれ以上変態発言しないでください」

「えー？ ノリ悪いなー」

「むしろノツたことなんてないと思いますが」

「奏だつたらノツてくれるのになー。ほら、俺キミに頼まれごとされた方なわけだし、ちょっとくらいサービスしてくれてもいいんじゃない？」

「あいにくと私は奏兄さんとは違いますから。あと取引は既に成立したはずでしょう。見返りについても話がついたはずですが？」

「そーだけどー。……ま、いいか。キミ今回は随分譲歩してくれたしね。それで本題だけどさ」

「どうですか、あなたの目から見て」

「なかなか面白いことになってるねー。ちょっと調べただけで怪しいのゴロゴロしてるし色々思惑も交差しすぎてて全体像ヤバイよ？」

「やっぱりですか」

「俺としては大歓迎だけどねー。まあ、まだ全部把握したわけじゃないから、引き続き探っとくけど」

「お願いします」

「お代は身体で払ってね？」

「ふざけんなこの変態。失礼、何寝言ほざいてらっしゃるんですかあなた」

「やだなー、怒らないでよ。ちょっとしたジョークだからさ」

「悪趣味極まりないですね。知ってましたけど」

「いやー、理解ってイイね。愛？」

「ち・が・い・ま・す」

「そんな一音一音区切ってまで強く否定しなくても」

「それくらいいしないとあなた斜めどころか奇ッ怪な感じに捻くれた解釈するじゃないですか」

「違う違う。あえて斜めに解釈してるだけだよ」

「余計夕子悪いじゃないですか。本当にあなた最悪ですね」

「お褒めに預かり光栄の極み？」

「褒めてませんよ」

「知ってるよもちろん」

「……………。もういいですつつこむの放棄します」

「妹ちゃんなら放置プレイも大歓迎だよ？」

「とりあえずもうちょっと健全な言葉選びを心掛けてもらえないですか。私の精神の健康のために」

「他ならぬ妹ちゃんの頼みなら喜んで」

「とか言いつつどうせ口だけでしょ」

「本当、妹ちゃんは俺のことよくわかってるよねー。だからキミたち兄妹好きなんだけどさ」

「……………」

「イイねその心底迷惑そうな顔。ゾクゾクするよ」

「……………変態って死んでも治らないんですかねやっぱり」

「少なくとも俺は治る気がしないかなー」

「そうですね。それは残念です。ええ本当に」

「そういうブラックな発言するところも好きだよ妹ちゃん」

「私はあなたのそういう発言をするところが嫌いですよ。奇遇ですね」

「うん、奇遇だねー。むしろ運命かもね？」

「もう本当そついう切り返し止めてくれませんかね切実に」

とある日、保健室で。（後書き）

作中に出てくる『保健医』は現実には存在しない職名ですが、語感からこちらの方が相応しいと判断したので、この学園では『養護教諭』『保健医』だということ。

現状を把握しましょう

「現状をきちんと把握できてる自信がある人、手エ挙げて」

「……う。ええっと……」

「はい」

「……」

「……」

「一人か。また随分と不甲斐ないことで」

「……面目ない」

「まあ全員が把握してたらしてたでびっくりだけど。ってわけでミスミ、あんたの目からみた今の状況は？」

「『過激派』登場、といったところでしょうか」

「ハイ正解。でも点数としては八十点ってところかな」

「何が足りませんでしたか？」

「過激派もただけど、様子見組が動き出しちゃった感じ。実害は今のところないみたいだけど。あとはまあ別枠の方々が策を練ってるっ

「ぼい」

「それはまた 随分と動いたね。抑止力が抑止力として働かなくなってきたってこと？」

「まあそう考えるのが妥当だろうね」

「……抑止力ってナニ？」

「……………？」

「……………。予想はしてたけどあんたら二人は天然の行動だったわけねアレ。まあ考えてやってるとは思わなかったけど。特にユズ」

「なんかよくわかんないけど貶されてるよね?!」

「いや感心してる。最善とは言わないけど最悪でもない行動だったわけだし」

「……………。もしかして」

「うん？」

「あの子に対する行動……………のこと？」

「その通り。なんだレンリは完全に天然ってわけでもなかったのか」

「……………？」

「なんでそこで首傾げるわけ。自分でわかんないの？」

「……多分、」

「……」

「……半分くらい、素？」

「なんで疑問符付くんだよとかそれ完全天然より微妙じゃないのとかつつこみたい気もするけどまあいいや。……要はあんたらの行動が抑止力になる期間は過ぎたみたいだからちよつと考えないとねってことだよ。わかった？ ユズ」

「……た、多分？」

「ものすごく不安を煽るなその返答。まああんたは本能っていうか野生の勘的な何かでどうにかかなりそうだからいいか」

「……それ、理解させる努力を放棄しただけじゃないの？」

「そうとも言う。つつーかそこまで面倒見てられるかっての。元はと言えばあんたらの問題なんだからおかしいよね普通に」

「それは否定しませんが、ユズが可哀想じゃないですか。仲間外れで」

「仲間外れは断定なのか。そっちのが酷いと思うけど」

「いやですね、比喩に決まってるじゃないですか」

「直喩表現なら『ような』を付ける。ユズ本人に比喩って伝わって

ないから」

「……ミスミ、実はオレのこと嫌い……?」

「ほらマジ凹みしただろうが。不甲斐ない自分に腹立てるのはともかく周りに当たるな」

「……。お見通し、ですか」

「何年幼馴染やっているとってる。……ほらユズ。そういうことだから落ち込まない。ミスミが八つ当たりするくらいには氣イ許してるってことなんだから」

「……え。そうなの?」

「そうですね。すみませんユズ。つい当たりました」

「……えーと、本気じゃなかったならオレはいいんだけど。そんなに今の状況ってヤバいの?」

「まあ、それなりには。実害出始めてるしね」

「え!?! 実害って、なんかあったの!?!」

「あったから言ってるんだっての。ミスミは現場に遭遇してたから氣付いたんだろうし」

「ええ。話を聞いていたら何やら不自然だったの」

「なんかの補正でもかかってんじゃないのってレベルで居合わせた

もんなおまえ。そのおかげで怪我の処置が早くできたのはあるにしろ」

「……怪我の処置と言えば」

「ん？」

「この間保健医が変わったのは知ってる？」

「知ってるけどそれが？」

「その経緯がちょっと不自然というか……気になって。今前後関係調べさせてるんだけど」

「……あー」

「もしかしたらその動きと関係あるかも」

「ごめんそれ関係ない。あ、いや関係はあるけどカンナが考えてるようなのじゃない」

「……いやにハッキリ言うね？」

「あの人、奏兄さんの知り合いだから。ここに来た経緯がちょっとアレなのも仕様だから。そういう人だって納得しといて」

「……もしかして、君とも結構親しい人だったりする？」

「親しいか親しくないかでいったら多分前者だけどあんまり認めたくない感じの人種」

「また随分癖のありそうな……」

「なんていうか、奏さんの知り合いって感じだね!」

「……類は友を呼ぶ……?」

「あんたらが奏兄さんのことをどう思ってるのかよくわかる反応だな。否定はしないけど。身内から見てもちょっとアレなところあるし。でも流石にあの人と一緒にされるのは複雑なだけだ」

「君がそこまで言う人間って相当だよな。ちょっとうちの人事が不安になってきたんだけど」

「人間性は限りなくアレだけど外面はいいから。少なくとも社会人としては真っ当に働くと思うから安心して」

「それで安心できるとしたら逆にすごいよね」

「否定はしない」

今後の指針を立てましょう

「とりあえずこの場合当面どう行動するかが問題なわけだけど」

「接触を控えるのは、逆効果だろうね」

「まああんまり良い手じゃないんじゃない。不自然すぎるし。飽きられたとか何とか中傷とか無いとも限らないし」

「今までどおりだと、大した効果は期待できないでしょうし」

「むしろ差し引きマイナスになるな間違いなく」

「じゃあ今まで以上に近付いた方が良いつてこと？」

「選択肢としてはそれくらいしか無いしね。その中だと一番マシだと思っけど」

「……どう近付くかが、問題？」

「匙加減考えないってのは確か。本人に負担掛けるのは本末転倒でしょ」

「やりすぎるとこれも逆効果なんですよね？」

「過激派が増えるかもね。統制取れてる人たちはともかく、暴走気味の人たちはな……」

「統制？」

「あんたらのファンクラブとか親衛隊とかそういうやつ。あの辺は最低限ルール決まってるからいいんだよねまだ」

「……普通逆じゃないの？」

「そこはほら、見返りさえ提示しておけば」

「……もしかして、もう取引、した？」

「とつくの昔に。あんたら自分のところのくらいはちゃんと管理した方がよいよ。見てるだけとかが多いからいいけど」

「だけど、公認にするのもそれはそれで面倒なんだよ」

「……あつちから、接触してこないし」

「っていつかそういうの認めちゃったらナルシストみたいじゃん！」

「その言い分は分かるけど　とりあえずユズ。それは基本公認してるミスミに対する抗議なの？」

「え」

「ミスミ、大体は管理　もとい公認してるよね。それ以外のところが今回暴走してるみたいだけど」

「ええ。包み隠さず好意を表してくださっている女性を把握しない

なんて有り得ないでしょう」

「それは個人の考えによると思うけど。その分勘違いする人を増やしてもいるしね」

「それは、……不甲斐ないと思っっていますけど」

「まあ恋する乙女は良くも悪くも無敵だから。恋に恋してる場合は特にね。どういう対応してたって行きすぎな人は出て来ちゃうみたいだし」

「……ともかく、どう接していくかだよ。そこのを決めておかないと、手に負えない事態になる可能性があるし」

「まずは連携……でしょうか」

「牽制っていうか、威嚇もしたほうがいいよね？」

「……本人には、伝える？」

「薄々勘付いてると思うし、当たり障りない程度のこととは言っておいたら？ 全部言うのはオススメしないけど」

「必要以上に怖がらせることになるから、ですか？」

「まあそんな感じ。全部伝えるメリットよりデメリットの方が大きいだろうから」

「手を出せない状況を作る方が先ってことでいいんだよね。大本を断つのは先送りで」

「その大本を掴みきつてないだろうがそもそも。まずは面倒事に巻き込んだ相手の身の安全を最優先にしろ。　　っていうかここまできたら本気で転校させてあげた方が良いと思うけど。今からでも遅くないからそうしたら？」

「……………それを選べないからこんなことになっているんですけどね」

「知ってる。本当おまえらどうしようもないよな……………」

「し、しみじみ言われると傷つくんだけど!」

「傷つかないで開き直るような人間だったら縁切ってるっての。だから傷つけ。自分たちの身勝手さくらいちゃんと直視しろ」

「耳が痛いな」

「そうですね」

「……………」

「おまえらせめてもうちょっとと殊勝な態度とろうとは思わないのか
思わないんだよねどうしようもないな本当に」

それはお詫びにかこつけた

(前書き)

いつもと文の形式が違います。地の文あり。新キャラ寄りの三人称。

それはお詫びにかこつけた

生家の権力とそれなりに知られている己の顔を使って入った校舎内で、彼は人を探していた。

制服の違う身はそれなりに目立つが、ある程度気配を殺しているので騒ぎになるほどではない。

ここに通う兄から聞いた話を思い出しながら歩を進めれば、兄と探し人が居るのであるう一角に辿り着いた。

暫し足を止めて、室内の様子を探る。大まかに把握したところで、躊躇なく扉に手をかけた。申し訳程度に声を掛けて、開く。

「 驚いた」

少しも驚いていなさそうに呟く声も、窓際の席に座って振り向くその顔も、予想通り探していた人のもので。

少しだけ表情を緩ませた彼は、丁寧に頭を下げた。

「 お久しぶりです。 お変わりないようで何より」

「 うん、久しぶり。 香澄くんは結構変わったね。 成長期だからかな」

「 そうだと思えます。 最後にあなたに会ってから、身長が十センチほど伸びましたから」

「道理で目線が合わせにくいと思った」

そう言って笑うその人に、己が考えていたよりも悪い状況ではな
いらしいと胸を撫で下ろす。

「ところで今日平日だけど学校は？ きみに限ってサボりはないと
思うけど」

「今日はうちの学校は休みなんです。馬鹿兄が今まで以上にご迷惑
をおかけしていると聞いて、一度ご挨拶に伺わなければと思ってい
たのでこの機会に」

「それでわざわざ学校まで？ ……っていつかここ生徒とか関係者
以外も入れるんだね」

「それは、色々ごり押ししましたから」

「平然という台詞じゃないよねそれ」

「カンナさんのところですから、それくらいしないと入れなかつた
んです。手続きも交渉も面倒だったので二度とやりたくないですが」

「そこまでして来てもらわなくてもよかつたのに」

「直接会ってお話したかつたので」

大真面目に告げた言葉はまるで睦言のようだったけれど、双方にそういう気持ちがないのは自明の理だった。言った方も言われた方も全く気にせず話を続ける。

「律儀だね。まっすぐ育ってくれて、小さい頃から知っている身としては嬉しいけど、もうちょっと肩の力抜いてもいいんだよ？」

「単純に、会える機会に会っておきたいというだけのことです。馬鹿兄と同じ思考回路だということは複雑な気持ちですが、理由があるときでないとおあなたに会うのは難しい」

「難しい？」

「俺の心情的にですが。これ以上のご迷惑をおかけするのは心苦しいですから」

「そんなの気にしなくてもいいのに」

「気にしているのに配慮できない馬鹿兄を見ている上、他の方々もお変わりないと聞いていますから」

「まあ、あいつらはもう今更だし。立ち回りはうまくなってはきてると思うよ。一応」

「経験から学ばないのは愚者のすることですから、そこまですはなかつたというだけのことでしょう。その学んだことを生かす方向が大分間違っているようですが」

「言うね、香澄くん。仮にも兄とその幼馴染なのに」

「多少幼少期に世話になったからと言って、現在の行動の瑕瑾が無かったことになるわけではないですから」

「まあそうだけど。あれでもあいつらの精一杯なんだから、あんまり厳しいこと言わないであげてほしいな」と

「……あなたならそう言うと思っていました。俺もあの人たちを反面教師に育った自覚はあるので、あまり口出しをするつもりはありません。ただ」

「ただ？」

軽く首を傾げる彼女に気付かれないように、一つ溜息をつく。
何でもないふりの得意な彼女を心配する人間はきつとたくさんいるけれど、そのすべてに彼女は気づかないふりをするのだろう。今まで通り。

「言っておきたかったんです。あなたが求めるのなら、手助けをする用意はあります」

「それは、香澄くん個人の話？」

「好きにとつていただいて構いません」

「その台詞が既に明言したも同然だよ。今は、いいよ。下手に刺激したくないし」

「……そうですね。でも、無理だけはしないでください。あなたはあの人たちに甘すぎる」

「まあ曲がりなりに幼馴染だから。大丈夫だって。『経験から学ばないのは愚者のすること』なんでしょう?」

「あなたの『大丈夫』はあまりあてにならないと俺個人は思っているんですが」

「さらっと結構酷いこと言ったね」

「余計な手出しをするのは本意ではないので、今日のところは引きます」

「『今日』って注釈がつくところがまた。介入する気満々?」

「さあ、わかりません。今後の状況次第でしょう」

「香澄くんもタイプが違うだけで、実のところ我は通す方だよね」

「馬鹿兄たちほどはないと自負していますが」

「それは同意する。ま、心遣いだけ受け取っておくよ」

「受け取っておくと言えば。忘れるところでした」

言いながら手に提げていた包みを差し出せば、彼女は目を瞬いた。

「馬鹿兄がいつもご迷惑をかけているお詫びに」

「本当にマメだね。中身はいつもの?」

「店は同じですが、新商品です。恐らくあなたの好みに合うかと」

「それは楽しみ。有難くいただくよ」

「どうせなら一緒に食べようか」と笑った彼女に笑みを返して、彼は「喜んで」と答えた。断る理由など、どこにもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5939w/>

± D a y s

2011年12月24日01時50分発行